第 1 回
（9月）

テスト時間	50 分
平均点（都標準）	63 点

問題番号		正答率
1	(1)	85.9
	(2)	74.1
	(3)	78.1
	(4)	98.7
	(5)	91.3
2	(1)	91.3
	(2)	56.9
	(3)	42.8
	(4)	72.5
	(5)	45.5

問題番号		正答率
3	〔問1〕	73.3
	〔問2〕	64.7
	〔問3〕	78.7
	〔問4〕	63.4
	〔問5〕	88.4
4	〔問1〕	59.3
	〔問2〕	67.5
	〔問3〕	61.4
	〔問4〕	79.4
	〔問5〕	3.5点

問題番号		正答率
5	〔問1〕	35.8
	〔問2〕	70.7
	〔問3〕	55.2
	〔問4〕	61.4
	〔問5〕	45.8

注：4〔問5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 首位を奪還する。
(2) ひそかにあるじへの反逆を企てる。
(3) 校庭の桜の木の剪定を業者に委託する。
(4) 厄介なことは早めに済ませてしまおう。
(5) 健康のために毎日散歩をすることを勧める。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 洗濯したセーターがチヂむ。
(2) シェークスピア作のヒゲキを読む。
(3) ザッコク入りのビスケットを食べる。
(4) ヒタイにじんだ汗をタオルで拭く。
(5) 運動会が雨天によりジュンエンとなる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

高校一年生の「僕（俺）」（松岡清澄）は、手芸が好きで、結婚する姉のためにウェディングドレスを作ろうとしている。「僕」にはこれまで友だちがいなかったが、高校で同じクラスになった宮多から声をかけられ、話をするようになった。昼休みには、仲の良い者同士が机をくっつけた「島」で昼食をともにできるが、宮多を中心とするグループの島に入った「僕」は、宮多たちがスマホゲームの話で盛り上がるなか、会話にうまく入ることができずにいた。

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかってもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になっていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなって、こうなって。勝手に指が動く。

ふと顔を上げると、近くにいた数名がこっちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑っている。

「なに？」

自分で思っていたより、大きな声が出た。他の島の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかった。宮多たちも。でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのか、ひとりがぎょっとしたように目を見開く。その隣の男子が「は？　なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？　そっちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らはもごもごと言い合い、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなささやきや笑い声が、耳たぶをちりっと掠めた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返ったその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままに、高杉くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親しげな感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

「高杉さん。くるみさん。どっちで呼んだらええかな？」

「どっちでも」

名字が高杉というだけで塾の子らに「晋作」と呼ばれていた時期があって嫌だった、なので晋作でなければ、なんと呼ばれても構わないらしい。

「*高杉晋作、嫌いなん？」

「嫌いじゃないけど、もうちょい長生きしたいやん」

「なるほど。じゃあ……くるみさん、かな」

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなっていく。今日は世界がうっすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭があいまいになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某らしい。

「私らと同じ中学やったで」

「覚えてない」

個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じった*ナポリタン・マスティフ。あるいは*ポメラニアン。集団の中でもてはやされる個性なんて、せいぜいその程度のものだ。犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながら仕草を真似される。

(1)「だいじょうぶ。慣れてるし」

けど、お気遣いありがとう。そう言って隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつまみあげて、しげしげと観察しはじめた。

「なにしてんの？」

「うん、石」

うん、石。ぜんぜん答えになってない。入学式の日に「石が好き」だと言っていたことはもちろんちゃんと覚えていたが、まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。

「いつも石拾ってんの？　帰る時に」
「いつもではないよ。だいたい土日にさがしにいく。河原とか、山に」
「土日に？　わざわざ？」
「やすりで磨くの。つるつるのぴかぴかになるまで」
放課後の時間はすべて石の研磨にあてているという。(2)ほんまにきれいになんねんで、と言う頬がかすかに上気している。
ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのような形状だった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。
「さっき拾った石も磨くの？」
くるみはすこし考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。
「磨かれたくない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」
石には石の意思がある。駄洒落のようなことを真顔で言うが、意味がわからない。
「石の意思、わかんの？」
「わかりたい、といつも思ってる。それに、ぴかぴかしてないときれいやないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」
じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬焦った。
「キヨくん、まっすぐやろ。私、こっちやから」
川沿いの道を一歩踏み出してから振り返った。ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリュックが移動しているように見えた。
石を磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。
ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。
「昼、なんか怒ってた？　もしや俺あかんこと言うた？」
違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。
いつも、ひとりだった。
教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がいないのは、心もとない。ひとりでぽつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさをごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともっとさびしい。
好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。
(3)文字を入力する指がひどく震える。
「ちゃうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」
ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。
「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」

ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほどけていた。(4)しゃがんだ瞬間、川で魚がぱしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたちのないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。そうすれば指で触れてたしかめられる。身にまとうことだって。そういうドレスをつくりたい。着てほしい。すべてのものを「無理」と遠ざける姉にこそ。きらめくもの。揺らめくもの。どうせ触れられないのだから、なんてあきらめる必要などない。無理なんかじゃないから、ぜったい。

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

それから、明日。明日、学校に行ったら、宮多に例のにゃんこなんとかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。(5)靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

（寺地はるな「水を縫う」による）

〔注〕高杉晋作――江戸時代末期の長州藩士。二十七歳で他界した。

ナポリタン・マスティフ――イタリア原産の大型犬。

ポメラニアン――ドイツ原産の小型の犬。

〔問1〕(1)だいじょうぶ。慣れてるし　と言ったときの「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　みんなの前でからかわれたことを気に病んでいたが、くるみに気遣われて気持ちが軽くなり、嫌なことは早く忘れてしまおうと思っている。

イ　自分の趣味が理解されないことに納得がいかず、いらだっていたので、くるみと話をするのも煩わしく、放っておいてほしいと思っている。

ウ　からかいの対象になるのは不快だが、学校では目立つ個性はうとまれがちなので、自分の趣味が受け入れられなくても仕方ないと思っている。

エ　自分の趣味は人に理解されにくく、否定的に見られることが多いが、わかってくれる人もいるはずなので、気にする必要はないと思っている。

〔問2〕(2)ほんまにきれいになんねんで、と言う頬がかすかに上気している。とあるが、この表現から読み取れるくるみの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　質問に答えて話すうちに、好きな石を研磨しているときの気持ちや石の美しさが思い起こされ、気分が高揚している様子。

イ　自分の趣味である石のことを尋ねられてうれしくなり、研磨した石の美しさをわかってもらおうと躍起になっている様子。

ウ　好きな石について聞かれたので、つい調子に乗っておおげさに話してしまい、気恥ずかしくなって顔を赤らめている様子。

エ　どれだけ言葉を尽くして説明しても、石の美しさや石を磨く楽しさをわかってもらえないので、少しいらだっている様子。

〔問3〕(3)文字を入力する指がひどく震える。とあるが、そのわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　自分を気遣ってくれる宮多と本当の友だちになりたいと願い、思い切って趣味を明かそうと決意して、気持ちが高ぶっているから。

イ　自分の趣味を打ち明けようと決意しつつも、その結果、宮多から敬遠されて孤立するだろうと思い、緊張や不安を感じているから。

ウ　自分はゲームには興味がないのだということを正直に伝えようと思い、宮多との関係が壊れないよう、言葉を慎重に選んでいるから。

エ　宮多なら受け入れてくれると信じているが、戸惑わせることになるかもしれないと考えると、打ち明けてよいか迷いを感じるから。

〔問4〕(4)しゃがんだ瞬間、川で魚がぱしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　自分が一歩踏み出せば新たな世界が広がると気づいた「僕」の心情を、次々と連鎖して動いていく情景に重ね合わせて表現している。

イ　「僕」と宮多が心を通い合わせ、確固たる友情を結んだことを、めまぐるしく変化していく水面の様子と対比して表現している。

ウ　「僕」が布の上に再現したいと心に思い描いている刺繍の図柄を、短い文を重ねた簡潔な情景描写によって明確に表現している。

エ　自分の刺繍が人から評価されたことを誇らしいと感じている「僕」の心情を、明るく晴れやかな情景にたとえて表現している。

〔問5〕(5)靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。とあるが、この時の「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　初めて人から自分の趣味を評価されたことで気持ちが明るくなり、もっと刺繍の腕を磨こうと決意するとともに、自分と同じような趣味を持つ人たちと積極的に交流し、友だちになりたいと願っている。

イ　わからないことがあるのは恥ずべきことではないと気づき、これまで知らなかったことを積極的に知ろうと努めるなかで、すばらしい個性を持った友だちが自然と見つかるのではないかと期待している。

ウ　自分を理解してくれる友だちができたことをうれしく思うとともに、からかわれたり攻撃されたりすることを恐れて誰とも関わろうとしてこなかったことを反省し、積極的に友だちを作ろうと思っている。

エ　自分を偽ることなく、好きなものを追い求めていこうと決意するとともに、他人とはわかり合えないと決めつけるのではなく、周りの人たちと率直に向き合い、関係性を深めていこうと前向きに考えている。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

あなたは、誰かと対話をした経験があるだろうか。会話ではなく、対話である。（第一段）

よほど特別の事情がない限り、私たちは日常的に会話をしている。駅のキヨスクでチョコレートバーを買い、会社の守衛さんに挨拶し、職場で同僚と打ち合わせをして、昼食時にショートメールで遠方の友人と近況を伝えあい、帰宅して家族と今日のニュースについて話し合う。このどの場面でも、私たちは会話をしている。そのいくつかは軽いやり取りであったり、ただ楽しむためであったりする。他方、仕事の打ち合わせなどはかなり真剣に、ときに厳しいやり合いをしなければならない。（第二段）

(1)だが、このどれもが会話であっても対話ではない。（第三段）

対話とは、真理を求める会話である。対話とは、何かの問いに答えようとして、あるいは、自分の考えが正しいのかどうかを知ろうとして、誰かと話し合い、真理を探求する会話のことである。ただ情報を検索すれば得られる単純な事実ではなく、きちんと検討しなければ得られない真理を得たいときに、人は対話をする。それは、自分を変えようとしている人が取り組むコミュニケーションである。（第四段）

ショッピングや仕事でのやり取りは、自分の要望と相手の要望をすり合わせようとする交渉である。友人や恋人との会話は、よい関係を保ち、相手を理解し、互いに話を楽しもうとする交流である。これらの会話は有意義かもしれないが、真理の追求を目的としてはいない。対話は、何かの真理を得ようとして互いに意見や思考を検討し合うことである。（第五段）

私たちは日常生活の中で、ほとんど対話する機会がないのではないだろうか。それは、真理の追求が日常生活で行われなくなっているからである。だが実は、対話をしなければならない場面は、日常生活の中にも、思ったよりもたくさんあるのだ。（第六段）

仕事場でも、ただ当面の与えられた業務をこなすだけではなく、仕事全体の方向性や意味が問われる場合、たとえば、「良い製品とは何か」「今はどういう時代で、どのような価値を消費者は求めているのか」「環境問題に対して、我が社は*頬かむりをしていいのか」など真剣に論じるべきテーマは少なくないだろう。家庭でも、子どもの教育をめぐって、そもそも子どもにとっての良い人生とはなにか、そのために何を学んでほしいのか、親と子どもとはどういう関係なのか、子離れするとはどういうことか、これらのことについて家族で話し合う必要はないだろうか。地域でも、どのような地域を目指せばいいのか、住人はどのような価値を重んじているのか、以前からの住人と新しく来た人たちはどう交流すればよいか。本当はこうしたことについて膝を突き合わせて対話する必要があるのではないだろうか。（第七段）

人生に関すること、家族と社会に関すること、政治に関すること、地域での生活のこと、私たちはこれらのことをほとんど対話することなく、日々を過ごしてしまっている。そうした難しい議論は頭のいい人たちに任せて、自分たちはせっせと働き、自分個人の生活だけを楽しめばいいのだ。

(2)しかし、そうした態度はすでに限界を迎えている。私たちは、公共の問題にもう無関心でいられないし、自分個人のあり方についても、いろいろな人から意見を聞いて考え直してみたい

と思っているのである。（第八段）

対話は面倒なことなのかもしれない。人の考えはそれぞれが異なっており、とりわけ、話が通じないと感じている相手と話し合うことは、ひどくストレスフル*である。（第九段）

そこで、筆者が思い出すのは、もう三〇年近く前、ベルギーに留学したときの経験である。ルーヴァン大学のある教授による比較哲学のセミナーは、毎週のようにヨーロッパ各地からゲスト*スピーカーを招いて、講演をしてもらい、そのあとに十分なディスカッションの時間を取るというスタイルのものだった。（第十段）

ある週は、たしか、スペインの若手研究者によってアリストテレス*についての発表があり、その後に質疑応答となった。筆者が驚いたのは、その質疑応答である。古代ギリシャの古典研究の発表であるのに、ある質問者は現代哲学のジャック・デリダの主張を持ち出し、「これに対してアリストテレスならどう答えるのか」と質問した。ある南米からの留学生は、「アリストテレスの哲学は、南米の先住民の国々を侵略したときの擁護論として用いられたが、あなたはこれについてどう弁護するのか」と質問した。ナイジェリアからの留学生は、「アリストテレスの存在論は自分たちの民族で信じられている神の存在論と著しく異なるが、どちらが正しいと思うか」と問うた。日本では考えられない質問たちである。こうした質疑が毎回のように続いた。（第十一段）

発表者たちは、日本ならば苦笑してやり過ごしそうな質問に対しても真摯に答えようとしていた。この質疑応答に見られるのは、同じ土俵に上げることが不可能に思えるような、まったく文脈の違う、まったく枠組みの違う考えであっても、あえて対峙*（たいじ）させようとする姿勢である。哲学のテーマは人類に共通するテーマであり、そこに参加する者は、あらゆる違いを携えて（乗り越えてではない）、対話すべきだという態度である。それは、どのような参加者も迎え入れようとする、誰に対しても応答しようとする態度である。（第十二段）

とはいえ、やはり発表者たちはそれほどうまく返答できなかったようにも記憶している。しかし彼らの発表は、それまででは想像できないほど、空間的にも時間的にも広大な枠組みに投じられ、きわめて異質な意見に出会い、生産的な揺さぶりをかけられたのである。（第十三段）

うかつにも当然視された文脈や慣習から見ればまるで異質であり、一見すると無関係とも言えるような、非常に異なった考え方の人たちが、まったく予想もつかない角度と発想から、突然に議論に参加してくる。その議論は、足元*を掬（すく）うやっかいな質問に満ちており、唐突な意見が混乱に拍車をかけ、ひとつの問題をまとめ終わらないうちに、さらにお門違いと言いたくなるような主張がなされ、それまでの話の流れが揺り動かされる。まったくの混沌*（こんとん）である。しかしこの混沌のなかでこそ、それでも皆で真理を追求しようとする態度のなかでこそ、素晴らしい創造性が生まれるのである。おそらくベルギーという多言語の国家では、こうした議論の重要性がよく理解されている。（第十四段）

後に述べるように、現代社会は、すべての人がそれぞれに真剣に取り組まなければならない共通の課題に直面している。そこで私たちが最初にしなければならないのは、こうした対話である。混沌たる状態のなかでも、皆で問題を共有して真理を追求する対話である。真理に直面しようとしな

い人々、現実を見つめない人々は、かならず衰退していく。かりに議論の場で共通の結論を得られなくても、互いが思考を深めて、自分なりの意見を持ち帰って、それまでの自分のあり方を変えることができる。(3)今の時代に求められているのは、粘り強い思考を伴った、異質な人々同士の対話ではないだろうか。（第十五段）

（河野哲也「人は語り続けるとき、考えていない――対話と思考の哲学」による）

〔注〕 頬かむり――知らないふり。
ストレスフル――ストレスを強く感じる様子。
ゲストスピーカー――招待されて話をする人。
アリストテレス――古代ギリシャの哲学者。
対峙（たいじ）――向き合うこと。
足元を掬（すく）う――「足を掬う」と同じ。相手の隙をついて失敗させる。
混沌（こんとん）――入りまじって区別がつかないこと。

〔問1〕 (1)だが、このどれもが会話であっても対話ではない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 私たちが日常生活の中で行っている会話は、家族や友人、職場の同僚との良好な関係を保つための軽いやり取りであり、真剣で厳しいやり取りをすることは避けられていると考えたから。

イ 私たちが日常生活の中で行っている会話は、自分個人が楽しむことを目的とした気楽で快適なやり取りであり、社会を変えることを目的とした哲学的で難しい議論ではないと考えたから。

ウ 私たちが日常生活の中で行っている会話は、意思の伝達や他者との共感を目的とした相互コミュニケーションであり、物事の真理を自分個人で検討し追求するものではないと考えたから。

エ 私たちが日常生活の中で行っている会話は、互いの希望をすり合わせたり理解し合ったりするものであり、真理を得ようとして互いに意見や思考を検討し合うものではないと考えたから。

〔問2〕 (2)しかし、そうした態度はすでに限界を迎えている。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 公共の問題に関心を持ち、自分のあり方を見つめ直そうとする人たちからさまざまな意見が出され、議論の場が混沌としているということ。

イ 現代社会が直面する共通の課題や個人のあり方について、すべての人がそれぞれに真剣に向き合い、議論する必要が生じているということ。

ウ 現代社会にはさまざまな難しい課題が山積みとなっているため、私たち個々人が自分の生活を楽しむことができなくなっているということ。

エ 難しい問題は人任せにし、自分個人の生活のみを考えるという態度では、他者と交流する機会が少なくなり、社会性が失われるということ。

〔問3〕 この文章の構成における第十四段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第十段以降に述べた対話の具体例に対して、それとは対照的な事例を挙げて一つ一つ詳しく説明し、論の展開を図っている。

イ 第十段以降に述べた対話の具体例について、その内容を簡潔にまとめ

たうえで筆者の考えを述べ、文章全体の結論につないでいる。

ウ　第十段以降に述べた対話の具体例に関して、新たな観点を提示して筆者の考えを具体的に説明し、論を分かりやすくしている。

エ　第十段以降に述べた対話の具体例を受けて、筆者が疑問視する点を示してその内容を一つ一つ分析し、問題の所在を明らかにしている。

〔問4〕(3)今の時代に求められているのは、粘り強い思考を伴った、異質な人々同士の対話ではないだろうか。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　考え方の異なる人々が皆に共通する課題について対話を続けていくうちに、他者の考えの新しさや重要性に気づき、あらゆる違いを乗り越えて互いを認め合えるようになると考えたから。

イ　考え方の異なる人々が対話すると、話の流れが揺り動かされて混乱するので、その混乱を避けるためにさらに互いに心を開いて話し合うようになり、共通の結論が得られると考えたから。

ウ　考え方の異なる人々が対話する際は、話が通じないことが前提となるため、唐突な意見や予想外の発想が出されても混乱することなく、冷静に真理を追求していくことができると考えたから。

エ　考え方の異なる人々が問題を共有し、対話を重ねるなかで、それまでの自分にはなかったさまざまな考えに出会い、互いが思考を深めて、自己を新たなものにすることができると考えたから。

〔問5〕国語の授業でこの文章を読んだ後、「それまでの自分のあり方を変える対話」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて**二百字以内**で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「な

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

歌集を編纂（へんさん）するという行為は、素材となる歌を多角的に分析し、一定の解釈を施すことと分かちがたく結びついている。＊貫之（つらゆき）をはじめとする撰者（せんじゃ）たちは、個々の歌の「こころ」と「ことば」とを吟味し、適切な箇所に置いて、＊『古今集（こきんしゅう）』という一つの作品を形成した(1)。それぞれの歌は、いわば歌集をかたちづくるピースとして、『古今集』の論理の中に位置づけられている。その一方で、それらの歌には、歌集の論理には収まりきらないふくらみや広がりも存在している。三十一文字の小さな器の中で感情の核心を表現する和歌は、置かれた場面や文脈によって多様な意味を持つことができる――それが歌の生理であるといってもよいであろう。(2)歌集の論理は、ときとして歌の生理に制約を加えることもある。

典型例として『百人一首』でも知られる次の一首を取り上げよう。『古今集』恋四の中盤に置かれる「待つ女」の歌である。

今来（こ）むと言ひしばかりに長月（ながつき）の有明（ありあけ）の月を待ち出（い）でつるかな

（恋四・六九一・素性（そせい）法師）

「すぐ来るからね」とあなたが言ったばかりに、その約束の言葉を信じて、九月の有明の月が出るまで待ってしまいました。

作者の素性法師は、六歌仙の一人である僧正遍昭（そうじょうへんじょう）（遍照と記す写本もある）の子で、入集歌数は貫之、＊躬恒（みつね）、友則（とものり）に次ぐ三十七首（伊達（だて）本による。三十六首とする本もある）。『古今集』を代表する歌人の一人である。右の歌は、僧侶である素性が「女」の立場から詠じたもの。『古今集』の恋歌には、実体験の中で詠（よ）まれた歌も、このような虚構の歌も、区別なく含まれている。

(3)さて、今考えてみたいのは、この歌の「女」はいったいどのくらいの時間待ったのかという問題である。手がかりになるのは、女が「長月の有明の月」を見ていること。「有明の月」は、陰暦の十六日以降、特に月末に近づいた二十日以降の月で、夜が明けたのちも空に消え残っているものを言う。また「長月」は陰暦の九月。秋の最終月であり、夜長のイメージとも結びついている。こうしたことを考え合わせて、古来二通りの解釈が提示されてきた。

A　一夜待つ＝男の口約束を信じた女は、長い秋の夜に一晩中待ちつづけて、とうとう夜の終わりを告げる有明の月に出会ってしまった。

B　秋の終わりまで待つ＝男の口約束を信じた女は、幾夜も虚（むな）しく待ちつづけて、とうとう秋の終わりを告げる長月の有明の月に出会ってしまった。

Aのように解するなら、期待から始まり失望に終わった一夜の、女の心の動きが際（きわ）やかに浮かび上がる。約束を＊反故（ほご）にした男は、急用でもできたのであろうか。男の訪れを待ちわびているあいだに季節が移ろい、秋もうおしまいである。いつものように「今来む」と約束して、気軽な様子で帰っていった男は、もしかしたら二度と来ないのかもしれない。「長月の有明

の月」を、一夜の終わりと捉えるのか、秋の終わりと捉えるのか。この歌の表現には、二通りの解釈を許容するふくらみがある。いずれにしても、女はひとりぼっちで、心細い晩秋の残月を眺めているのであるが。

それでは、この問題について『古今集』はどう考えているのだろうか。『古今集』はひとまずこの歌を、Aの「一晩中待ちつづけた」歌として捉えているらしい。というのは、前述のとおり素性の歌は恋四に収められており、その前後には、次に挙げるような恋人の訪れを「期待して待つ女」の歌が並んでいるからである。現代語訳は女性の口調にしてみよう。

1　君や来(こ)む我や行かむのいさよひに真木(まき)の板戸もささず寝にけり
（恋四・六九〇・よみ人知らず）

2　今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな
（恋四・六九一・素性法師＝前掲）

3　月夜よし夜よしと人に告げやらば来(こ)てふに似たり待たずしもあらず
（恋四・六九二・よみ人知らず）

4　君来ずは閨(ねや)へも入らじ濃紫(こむらさき)我が元結(もとゆひ)に霜は置くとも
（恋四・六九三・よみ人知らず）

あなたがいらっしゃるかしら、私の方から行こうかしらとためらっているうちに、十六夜(いざよい)の月も出て、真木の板戸も閉ざさずに、そのまま寝てしまいました。

今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな
（恋四・六九一・素性法師＝前掲）

月夜よし夜よしと人に告げやらば来(こ)てふに似たり待たずしもあらず
（恋四・六九二・よみ人知らず）

「月が美しい、素晴らしい夜ですよ」とあの人に告げたなら、来てほしいと言っているのと同じで恥ずかしい。待っていないわけでもないのだけれど。

君来ずは閨(ねや)へも入らじ濃紫(こむらさき)我が元結(もとゆひ)に霜は置くとも
（恋四・六九三・よみ人知らず）

これらの歌の女たちは、板戸の鍵も鎖(とざ)さず（1）、あるいは戸口に立ち尽くして（4）、男の来訪を待っている。月明かりの夜は、恋人どうしの語らいが期待できるのであった（3）。ちなみに、1の「いさよひ」は、ためらう意の動詞「いさよふ」と「十六夜」の掛詞(かけことば)であり、1から3の歌には「十六夜の月」「有明の月」「月夜」が点景として歌いこまれている。これらの歌には「月」にまつわることばの連鎖も形成されているのであった。

待たれる「男」の方はどうしていたのだろうか。『古今集』は、この点にも目配りをしており、1の前に「男」の立場から詠まれた歌を置いている。

さむしろに衣片敷(ころもかたし)き今宵もや我を待つらむ宇治(うぢ)の橋姫(はしひめ)
（恋四・六八九・よみ人知らず）

幅の狭い敷物にひとりぼっちの衣を敷いて、今夜も私を待っているだろうか、あの宇治の橋姫は。

「宇治の橋姫」は宇治橋を守るという女神であり、この歌では宇治の里に住む恋しい女性の比喩と解される。女の歌と呼応するように、男もまた、自分を待って独り寝をしている愛する女の姿を思い描いているのであった。

『古今集』の中では、素性法師の「今来むと」の歌は、期待外れに終わったある一夜の歌として位置づけられている。歌集の論理の中で、並び合う歌々と共鳴し合うことによって、一首の意味が確定される。そのようなプロセスの集積によって、一つの作品としての『古今集』が成立するのであった。

その反面、歌集の中に位置づけることは、歌が本来含み持っていたはずのふくらみや広がり、つまり意味の多様性を削ぎ落とすことにもつながる。十分に魅力的で説得力のあった、**B**の読みが排除されてしまったように。

(5)歌集の論理と歌の生理のあいだには、実はせめぎ合うエネルギーが存在している。そして『古今集』は、このような動的なエネルギーを内包して成り立っている。

（鈴木宏子「『古今和歌集』の創造力」による）

〔注〕
貫之(つらゆき)――紀貫之(きのつらゆき)。平安時代前期の歌人。『古今和歌集』の撰者。
『古今集(こきんしゅう)』――『古今和歌集』。平安時代の歌集。
躬恒(みつね)、友則(とものり)――凡河内躬恒(おおしこうちのみつね)、紀友則。ともに『古今和歌集』の撰者。
反故(ほご)にした――なかったことにした。
真木(まき)――マキの木、または杉やヒノキなどの総称。
十六夜(いざよい)の月――陰暦十六日の夜の月。十五夜の月（満月）よりやや遅く出ることから、月がためらっているようだと見立てられる。
元結(もとゆひ)――髪を結び束ねるひも。
プロセス――過程。

〔問1〕(1)形成した。の主語にあたる言葉はどれか。**一文節**でそのまま抜き出して書け。

〔問2〕(2)歌集の論理は、ときとして歌の生理に制約を加えることもある。とあるが、「歌の生理に制約を加える」とはどういうことか。その内容を、次の□内のようにまとめるとき、（　　）に当てはまる最も適切な言葉を本文中から**八字**でそのまま抜き出して書け。

歌に内包される（　　）を削ぎ落とすということ。

〔問3〕(3)さて、今考えてみたいのは、この歌の「女」はいったいどのくらいの時間待ったのかという問題である。とあるが、『古今集』の中からは、「この歌の『女』」は「どのくらいの時間待った」と読み取れると筆者は述べているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　素性法師の歌に、月末に近づいた二十日以降の月が詠みこまれていることから、女は二十日間くらい待ちつづけていたと読み取れる。

イ　素性法師の歌に、陰暦の九月下旬の月が詠みこまれていることから、女は秋の始まりから終わりまで待ちつづけていたと読み取れる。

ウ　素性法師の歌の前後に、月が点景として詠みこまれた歌が並んでいることから、女は月が出るまでの間待ちつづけていたと読み取れる。

エ　素性法師の歌の前後に、男の来訪が期待できることをうかがわせる歌が並んでいることから、女は一晩中待ちつづけていたと読み取れる。

〔問4〕(4)ためらっているうちに　とあるが、この現代語訳に相当する箇所を、本文中の和歌の中から**五字**でそのまま抜き出して書け。

〔問5〕(5)歌集の論理と歌の生理のあいだには、実はせめぎ合うエネルギー

が存在している。とあるが、「歌集の論理」は歌にどう作用していると筆者は述べているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　歌が含み持つ多様な意味に一定の解釈を施し、並び合う歌々と共鳴し合わせることで一首の意味を鮮明に浮かび上がらせている。

イ　歌集の文脈にそって歌を位置づけることで歌の意味を確定し、歌が本来含み持っていた意味に説得力を持たせ、魅力を加えている。

ウ　歌に、歌集をかたちづくるピースとしての意味を加え、並び合う歌々と共鳴し合ったときに多様な意味が生まれるようにしている。

エ　関連する歌々と並べることで、一首では収まりきらない感情の核心を表現し、歌自体が持っている意味にふくらみを持たせている。

第 2 回
(10月)

テスト時間	50 分
平均点（都標準）	61 点

問題番号		正答率
1	(1)	99.5
	(2)	90.6
	(3)	45.7
	(4)	63.4
	(5)	26.5
2	(1)	18.6
	(2)	74.9
	(3)	65.2
	(4)	66.8
	(5)	75.4

問題番号		正答率
3	〔問1〕	59.8
	〔問2〕	71.4
	〔問3〕	82.7
	〔問4〕	85.8
	〔問5〕	74.0
4	〔問1〕	53.9
	〔問2〕	67.8
	〔問3〕	69.5
	〔問4〕	58.4
	〔問5〕	3.8点

問題番号		正答率
5	〔問1〕	76.6
	〔問2〕	36.1
	〔問3〕	48.1
	〔問4〕	80.4
	〔問5〕	49.8

注：4〔問5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 一人で解決できずに友人を頼る。

(2) 保育園で園児たちと一緒に遊戯をする。

(3) 感染症の流行に専門家が警鐘を鳴らす。

(4) 間違った行いがなかったかと自らを省みる。

(5) 社内の規則における慶弔休暇の取り決めをする。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 俳優として人気をハクす。

(2) 未知のリョウイキに足を踏み入れる。

(3) 政府が大規模なゲンゼイ策を打ち出す。

(4) 傘を忘れた知人に折り畳み傘をカした。

(5) 木の幹がヒンジャクで今にも倒れそうだ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

中学校に入学したマチは、図書室で借りた本の中に「サクラチル」と書かれた紙を見つけた。その後、別の本の中にも同じ筆跡の紙が挟まれているのを見つけ、返事のメモを残したことから、マチと見えない誰かとの文通が始まった。

夏休みが終わり、マチのクラスでは文化祭で合唱をすることになったため、パートごとに分かれて練習を始めている。

足を肩幅に開いて床にしっかりつけ、声を出すが、朝の練習はまだ体が完全には声を出す態勢に入っていないのか、歌っている最中でも、自分たちの声が出ていないのがわかった。

文化祭で歌う『遠い日の歌』の、ソプラノのパート練習。

オルガンで音を取りながら、一度通して歌い、二度目の練習に入る。すると、途中で、教室の後ろのドアが開いて、ソプラノのパートリーダーである琴穂（ことほ）が顔を出した。

「ごめん！　部活の片づけで遅れちゃった」

オルガンを囲んでいたソプラノの女子が一斉に歌うのをやめて、声の方向を見る。琴穂が顔の前で手を合わせて「ごめんごめん」と言いながら駆け寄ってくる。

「本当にごめんね。今どこ歌ってた？」

「――いいよ、もう一度最初からやろう」

すぐに練習が再開され、琴穂も加わったが、歌い始める前に、マチの後ろで「琴穂ちゃん、いつも遅れてくるよね」という小さな声が聞こえた。

自分のことではないけど、ドキンとする。聞いてはいけない気がするのに、耳が勝手に声の続きを聞いてしまう。

「リーダーなのに、やる気あるのかな」

琴穂は、朝練習を遅刻することが多い。その上、放課後も部活を理由に早めに練習を切り上げ、他のみんなを残して先に教室を出て行ってしまうことがよくあった。

歌った後で、それぞれグループごと、自分たちの歌の悪い部分について話し合う。

教室の隅から、アルトの女子の声が聞こえてくる。自分たちのソプラノより歌声がまとまっているように聞こえて、このままじゃ合わせて練習したときに声量が負けてしまうのではないか、つられてしまうのではないかと心配だ。アルトのリーダーであるみなみの声が一際（ひときわ）よく聞こえる。

マチがみなみの方を見ていると、琴穂が「ねえねえ」と話しかけてきた。てっきり合唱に関することだろうと振り向くと、いきなり「聞いてみた？」と聞かれた。

「何を？」

「みなみと恒河（こうが）のことだよ。夏休み、自由研究一緒にやったんでしょ？あの二人、つきあってるの？」

小声になって関係のない話をしようとする。

(1)その言葉を聞いた途端、ふいに、マチの胸の中でたくさんの感情が一度に揺れ動いた。

『リーダーなのに、やる気あるのかな』

さっき聞いたばかりの声を思い出したら、悲しくなった。本音を言えば、琴穂に真剣に練習して欲しいのはマチも同じだ。

「ちゃんと練習、しようよ」

とっさに飛び出した声が我ながら冷たく聞こえて、驚いた。琴穂が「え」と短く声を出す。きょとんとしたその表情を見たら、もう一押し、声が止まらずに出てしまった。

「しっかりやろうよ。琴穂、遅れてきたのに、関係のない話したり、全然、みんなに悪いと思ってる様子がないよ」

琴穂が目を見開いた。ショックを受けたのだと、表情でわかった。わかった途端、喉元が苦しくなって、それから全身が熱くなる。顔を伏せて、琴穂から離れた。

ややあって、背後から「わかった」と琴穂の声が答えた。思いがけず素直な声だったせいで、琴穂が沈んだ様子なのが、振り返らなくても伝わってくる。マチが返事をするより早く、「じゃ、もう一度ね」と他の子の声がして、歌の練習がまた始まってしまう。

声がうまく出なかった。息が苦しかった。

練習が終わった後で様子を見ると、琴穂は顔を俯(うつむ)けながら席に戻るところだった。マチの胸を小さな痛みがちくりと刺した。

そのとき、「マチ」と呼びかけられた。さっき、琴穂の遅刻を責めていた子たちだ。

「琴穂のこと、ありがとう。マチみたいなまじめないい子が注意してくれると助かるよ」

(2)こっそりと囁(ささや)くような声に「ううん」と首を振る。感謝されるようなことは何もない。黙って一人で席に着いた琴穂のことが気がかりだった。

その日は一日中、同じ教室の中で琴穂と気まずい時間を過ごした。

「どうしたの？　マチ、元気ないね」

「そんなことないよ」

みなみの声にも首を振る。誰にも、これ以上何も言いたくなかった。

一人で帰る前に、図書室に本を返しに寄る。(3)本と紙の匂いに包まれた大好きな場所に入った途端、全身から力が抜けて、泣き出しそうな気持ちになった。明日から、琴穂とどう顔を合わせればいいかわからなかった。合唱練習は明日もあるのに。

そのとき、図書室の奥の壁沿いに並んだ百科事典が目に留まった。見えない〝誰か〟と続けている文通。次にメモを残すのはマチの番だった。

本を手に取り、いつもより長く、手紙を書いた。

『真面目だ、いい子だ、と言われると、ほめられているはずなのに、なんだか苦しくなる。はっきり言えないことを優しいって言ってくれる人もいるけど、わたしは、本当は自分が人に嫌われたくないからそうしてるんだと思う。わたしは臆病です。』

次の日の朝練に、琴穂は遅刻もせず、時間より早く現れた。

何事もなかったかのように「さあ、練習するよー」と明るい声を出してみんなの前に立つ。マチにも「マチ、おはよう」と普段通り挨拶してくれた。

その声にほっとして、マチも「おはよう」と返事をする。けれど、琴穂が無理をしているんじゃないかと、やっぱりまだ気になった。

その日の放課後、図書室に急いで、ドキドキしながら本を開いた。昨日

残した自分の長い手紙に、相手がどんな返事を残しているかを考えると、待ち遠しいような、怖いような気持ちだった。

本を開くと、返事はもう来ていた。いつもより長い。

『断れない、はっきり言えない人は、誰かが傷つくのが嫌で、人の傷まで自分で背負ってしまう強い人だと思う。がんばって。』

――がんばって。

読んだ瞬間、胸がぐっと熱くなった。

手紙を抜き取って、本を元に戻す。(4)何度も何度も読んでから、お守りのように、そっと胸に当てた。便せんの内側が、あたたかく熱を持っているように感じた。

翌日の練習で、マチは思いきって、琴穂に自分の方から「おはよう」と挨拶してみた。練習用のテープのセットをしていた琴穂が、驚いたように一瞬黙ってから、マチの顔を見て、それから、一呼吸ついて、微笑(ほほえ)んだ。

「おはよう、マチ。がんばろうね」

「うん。――テープ、借りてきてくれたの？　ありがとう」

(5)「一応、リーダーだから」

照れくさそうに、琴穂がマチからぱっと目をそらした。

その日から、ソプラノは、みんなだんだんと声が出るようになっていった。

（辻村深月「サクラ咲く」光文社　による）

〔問1〕(1)その言葉を聞いた途端、ふいに、マチの胸の中でたくさんの感情が一度に揺れ動いた。とあるが、このときのマチの気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　自分の都合で遅れてきたのに謝りもせず、合唱の練習とは関係のない話を始めた琴穂にあきれはて、ソプラノの他の女子たちから陰口を言われている琴穂に同情する気にはなれないと思っている。

イ　合唱の練習に遅れてきて平然としている琴穂の鈍感さに驚くとともに、琴穂に対するみんなの不満が高まっているのを感じて、グループをまとめるには自分が琴穂を注意するしかないと思っている。

ウ　部活を優先させる琴穂の態度に接して、合唱の練習に参加している自分が軽んじられているようで不愉快に感じるとともに、琴穂のせいでグループ内に不和が生じているのを悲しく思っている。

エ　パートリーダーとしての自覚のない琴穂の言動をもどかしく感じていらだつとともに、このままでは琴穂に対するみんなの不満が募り、合唱もうまくいかないのではないかと不安に思っている。

〔問2〕(2)こっそりと囁(ささや)くような声に「うーうん」と首を振る。とあるが、この表現から読み取れるマチの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　琴穂の勝手な振る舞いを友だちとして見過ごすことができずに注意したが、その結果琴穂を孤立させてしまったと思って後悔している様子。

イ　遅刻した琴穂を陰で非難するばかりで、直接はっきりと注意しなかった子たちから感謝されてもうれしくないので、げんなりしている様子。

ウ　本当は臆病なだけなのに、まじめないい子と言われてとまどうとともに

に、自分が注意したせいで琴穂を傷つけたと思って心を痛めている様子。

エ 琴穂のためを思って注意したのに、琴穂が傷つけられたと誤解して、自分を避けるようになったことにとまどい、気分が落ち込んでいる様子。

〔問3〕(3)本と紙の匂いに包まれた大好きな場所に入った途端、全身から力が抜けて、泣き出しそうな気持ちになった。とあるが、マチが「泣き出しそうな気持ちになった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 安心できる場所に来たことで緊張感がほぐれ、人前では見せまいとしてきた、琴穂との関係についての不安や苦悩が込み上げてきたから。

イ 琴穂を注意した自分の行動は間違っていないと思っているが、琴穂との関係を修復することはできないだろうと思うと悲しくなったから。

ウ 落ち込んだ琴穂の姿が見えない場所に来たことで気持ちが楽になるとともに、好きな本を読むことができると思ってうれしくなったから。

エ 誰もいない図書室で琴穂の自分に対する態度を思い返してみて、琴穂に嫌われたとはっきり感じ、悲しみや寂しさが込み上げてきたから。

〔問4〕(4)何度も何度も読んでから、お守りのように、そっと胸に当てた。便せんの内側が、あたたかく熱を持っているように感じた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 待ち望んでいた手紙が届いていたことに喜び、興奮しているマチの様子を、感覚的な言葉を用いてわかりやすく表現している。

イ 手紙を繰り返し読むうち、琴穂と仲たがいした苦しさが薄まっていくマチの様子を、簡潔な言葉を用いて端的に表現している。

ウ 自分を肯定してくれる手紙の文面が心にしみ入り、勇気づけられているマチの様子を、たとえを用いて印象的に表現している。

エ 手紙を読んで自分の正しさを自覚し、積極的に行動しようと決意したマチの様子を、手紙を人に見立てて躍動的に表現している。

〔問5〕(5)一応、リーダーだから と言ったときの琴穂の気持ちとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分を嫌っていると思っていたマチから突然お礼を言われて驚いたが、リーダーとして尊重されていることがわかって、誇らしく思っている。

イ 今まで真剣に練習してこなかったのに、それを注意したマチの前でリーダーぶった態度をとることが後ろめたく、きまり悪いと感じている。

ウ 気まずくなっていたマチと自然と話せてうれしくなり、これからはマチから嫌われないよう、真剣に合唱の練習に取り組もうと思っている。

エ 面と向かってお礼を言われて気恥ずかしく思いつつも、マチが自分の自発的な行動に目をとめ、評価してくれたことをうれしく思っている。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

日常生活では、「刻」離れが非常に激しくなっているということである。

（第一段）

「伝え合い」の内容を支えているのは、本来は「その人」、「その時」、「その場」の状況に「そぐう」ものであった。それが現在では、意味だけが自立しているという面が、きわめて明確に見られるのである。（第二段）

もう何年も前から、幼稚園では「シンデレラ」の話をするのが難しいという。悪い母親がいて、二人の娘がいた。雪が降る日、その母親は自分が産んだのではない方の娘に向かって、「外に行って、イチゴを採っておいで」と言う。現在、初老を迎えるくらいの年齢の人ならば、そこで涙を流すかも知れない。しかし、現在の幼稚園には、シンデレラが置かれている状況が理解できない園児がいるという。「なんで、コンビニに行かないの？」、「お金が足りないのかな？」などと、話に対する反応のあり方が、大人たちが期待するものとはまったく異なるのだ。それも当然かも知れない。今では、一年の大半がイチゴの季節なのである。子どもたちが、問題は値段の面だけと考えても不思議ではない。（第三段）

(1) こうした「伝え合い」の内容と「刻」のズレが、日本は目立って激しい国であると思う。その大きな理由は、高度に発達したマスメディアが国全体を覆ってしまったことにある。（第四段）

月刊誌は本来の季節の一ヶ月、二ヶ月前に出る。十一月はクリスマス真っ盛り、十二月は新年気分の中にある。夜中の話題であるべきことが、朝、昼のテレビ番組でお構いなくとり上げられる。また現在の日本では、家庭で日常的に食べる農作物は、とっくの昔に本来の意味での「季節」というものを失っている。たとえば、「旬」に関しては、販売や宣伝の都合上、日取りがあらかじめ決められるので、たとえその月に現物が入手できなくても、収穫物の量が予定とは多少違っても、旬の祭りは行われる。人びとは、本来は季節ごとに様々なあり方で廻ってくる現実の「旬」を感じることもなく、予定された通りに旬が廻ってくるものだと思いこんでいるのである。（第五段）

マスメディアが作る情報を、ナマの現実よりも現実感をもって信じる。こうした人が普通となったのが、今の日本である。そして、もちろん、こうした傾向は食べ物の「旬」に限ったことではない。（第六段）

本来、「伝え合い」と「時間」との関係でもっとも重要なことは、その用法である。それには、一般的に話題の対象となる「時間」の枠内だけではなくて、＊「根回し」のように、対象とする時間の前に、じっくりと使われる時間もある。短時間のうちに二つも三つものことを片づけるという時間の使い方もある。（第七段）

「時間」の用法の変化を歴史的に見ると、音楽はそのあり方を最も端的に示す例の一つであると言えるだろう。（第八段）

たとえば「盆踊り」を見てみよう。盆踊りは、本来、前もって決められた定刻に始まり、定刻に終わるものではなかった。それは、後になってふりかえってみて初めて、「あの時に始まり、あの時に終わった」と言えるものであった。大体のところ決まっているのは、それを行う季節と、「日が暮れてから」ということだけであった。日が暮れても、雨が降ってきた

ならば、雨が止むまで待つ。太鼓叩きの青年が来なければ、その人物が姿を現すまで待つ。天気がよくて皆の気分が乗れば、いつもより遅い時刻まで踊る。その時間帯の中で、参加者は日ごろ会う機会が少ない知人と出会う。その場の雰囲気の中で、ある者たちは意気投合して、その後の良き友となる。このように、人びとは様々な「伝え合い」の機会を、盆踊りの緩やかな時間の流れの中で持ったものであった。（第九段）

音楽も元々、いつの間にか始まり、いつの間にか終わるものであった。そのあり方は、その場の状況に「そぐう」ものであった。しかし、時代は変わり、興行としての音楽が出現するようになると、音楽は客観的に計られる時間というものに制約されるようになった。（第十段）

まず、音楽を演奏するには、会場とその使用料が必要となる。出演料も当然ふくまれる。その費用は、時間帯や入場可能な人数をもとに算出される。使用時間の制約が先に立つので、演奏時間帯と音楽内容との「そぐい」は無視されることもしばしばである。朝っぱらから小夜曲（セレナーデ）*も可能であるし、季節はずれのクリスマスソングや田植え歌、大人ばかりの夜の集まりの場で若者向けのポップミュージックなども珍しくない。音楽に不可欠の要素であったはずの状況との「そぐい」というものは軽視され、本来は場違いとされるはずの音楽が、人びとに何の違和感も持たせないものとなってきたのである。（第十一段）

そして、十九世紀にレコードが発明されると、今度は、レコード盤によって定められた時間内に音楽を閉じこめる結果となった。定められた時間から一秒でも長い作品は、商品の企画に外れるので避けられる。レコード盤に定められた時間より演奏時間が極端に短いものも、商品として成立しないので避けられる。やがてSP盤*がLP盤*となり、収録されている作品の演奏時間は長くなったが、基本的な条件は同じである。ウォークマン*が流行り、CDが発売され、何千曲を収めることができるiPod（アイポッド）*が人気を集め、今やスマートフォンで音楽をダウンロードして楽しむようになっている。わずか百年あまりのうちに起きたこの変化は、音楽をその背後にあった「時間」と「空間」から切り離し、何かに閉じこめ、個人が持ち歩きできるものへと変えたのである。（第十二段）

このような「時間」の用法のあり方は、現代社会では経済的な効率が関わることのほぼすべてに通じている。ラジオ、テレビは言うまでもない。政治演説から学問発表の場、果てはその合間に行う個人的な会話にいたるまで、人びとは定められている時間を気にしながら、「伝え合い」を行う。

(2)
個々の社会が創りあげた「時間」の枠組みが段々と画一化され、次第に一律の流れを刻みながら、人間を縛り始めてきたのである。（第十三段）

人間の「伝え合い」が「時間」に縛られる一方で、「時間」や「空間」のコンテクスト*を失ってきたことも、現代社会に特徴的な現象である。従来の「伝え合い」は、人と人とが直接に出会ったり、電線で結ばれた電話を通したり、情報を運ぶ道路や鉄道線路を利用したりしながら、いわば、何らかの形で「線でつながる」ことによって成り立っていたのである。しかし、現代は「ワイヤレス」の時代である。人は物理的につながらなくとも、地球の裏側の相手とでも、「伝え合い」を行うことが可能となった。また最近まで、道具を使う「伝え合い」では時間と距離で価格が左右された。しかし、インターネットを介したEメールなどでの文章のやりとりでは、使用時間帯や使用時間の長短、相手との距離の遠近などは価格に関係

しない。（第十四段）

相手と対面して行う直接的な「伝え合い」と、インターネットを介した間接的な「伝え合い」。これらは、本来、非常に異質な「伝え合い」である。(3)しかし、この区別を意識することさえない人が増えて来ているのは、人間という動物の「伝え合い」を考えるうえで、非常に気にかかる傾向の一つである。（第十五段）

（西江雅之「ことばだけでは伝わらない――コミュニケーションの文化人類学」による）

〔注〕伝え合い――筆者は、「二人以上の人間が、同じ時間、同じ場所で行うコミュニケーション」を、本来の「伝え合い」と考えている。

根回し――物事をうまく進めるために、関係者に事前に了解を得ておくこと。

小夜曲（セレナーデ）――夕方、恋人のために窓下などで歌いかなでられる音楽。

SP盤、LP盤――レコード盤の種類。

ウォークマン――持ち運びに便利な小型の音楽再生装置の商品名。

iPod（アイポッド）――携帯型デジタル音楽プレイヤー。

コンテクスト――文脈。意味合い。

〔問1〕(1)こうした「伝え合い」の内容と「刻」のズレが、日本は目立ってぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。激しい国であると思う。とあるが、筆者がこのように述べたのはな

ア　日本では、日常生活で季節や旬を感じることがなくなり、時間を客観的に捉えることができなくなったと考えたから。

イ　日本では、高度に発達したマスメディアが、季節や旬が巡ってきたことをいち早く伝えるようになったと考えたから。

ウ　日本では、マスメディアが発達したため、時間や空間を超えてさまざまな情報を得られるようになったと考えたから。

エ　日本では、現実に即した時間ではなく、マスメディアが作る情報に基づいて時間を捉えるようになったと考えたから。

〔問2〕この文章の構成における第七段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　それまでに述べてきた内容について、例を挙げながら一つ一つ詳しく説明し、論を理解しやすくしている。

イ　それまでに述べてきた内容に基づき、問題点を整理して筆者の考えを説明し、自説の妥当性を強調している。

ウ　それまでに述べてきた内容を受けて、新たな観点を提示して説明を加え、論の展開を図っている。

エ　それまでに述べてきた内容に対して、それとは反する見解を具体例とともに提示し、話題の転換を図っている。

〔問3〕(2)個々の社会が創りあげた「時間」の枠組みが段々と画一化され、次第に一律の流れを刻みながら、人間を縛り始めてきたのである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　従来は緩やかな時間の中で社会のさまざまな行事が行われていたが、

興行としての行事が出現したことで、効率的に時間を使うことが求められるようになり、時間の流れが急激に速まったということ。

イ　従来はそれぞれの社会でその場の状況に即した時間の使い方をするようになり、客観的に計られる時間に制約されるようになったということ。

ウ　従来はそれぞれの社会ごとに特定の時間の使い方をしていたが、マスメディアの発達と普及に伴って、経済効率を追求していった結果、あらゆる社会で共通の時間の使い方をするようになったということ。

エ　従来、人びとはそれぞれの属する社会で定められた時間の範囲内で活動してきたが、経済が発展した現代社会においては、利益率を上げるために、長時間の活動を強いられるようになったということ。

〔問4〕(3)しかし、この区別を意識することさえない人が増えて来ているのは、人間という動物の「伝え合い」を考えるうえで、非常に気にかかる傾向の一つである。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　「伝え合い」の質的な違いを意識しない人は、人間が動物であるということを忘れ、声を使うよりも道具を使うほうが、「伝え合い」の内容が正しく伝わると誤解していると考えたから。

イ　「伝え合い」の質的な違いを意識しない人は、人間の「伝え合い」は本来、相手との関係、時間や場所の状況が関与して成り立つものであるということを見落としていると考えたから。

ウ　「伝え合い」の質的な違いを意識しない人は、インターネットを介した「伝え合い」が人間の特性に適していると考え、相手と対面することを避けるようになりかねないと考えたから。

エ　「伝え合い」の質的な違いを意識しない人は、「伝え合い」の内容について、言葉の意味を正しく捉えることができず、相手や時や場に応じてさまざまに解釈してしまうと考えたから。

〔問5〕「『伝え合い』で気をつけること」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

旅とは、住んでいるところを離れて、他所に行くことを言います。子どもにとっては、近所のお店に一人でおつかいに行くのも、旅です。わくわく、どきどきしながらの、一種の冒険旅行です。そして、成長とともにその距離は少しずつ遠くに延びて行きます。(1)また、交通機関のめざましい発達によって、昔と今では、旅の様相は大きく変化しました。古典文学の時代は、基本的には徒歩の旅ですから、時間もかかりますし、危険も伴います。旅立ちが永遠の別れになることも珍しくはなかったのです。

しかし、いつの時代も変わらないのは、旅は日常からの脱出であり、新たな発見や驚き、冒険の喜びや苦労を私たちに与えてくれるという点です。子どもの頃に旅行したとき、自分の知らないところで、自分と全く関わりなく生きている人がいるということ、これまでこの人たちと関わりなく同じ時を刻んできたのだということに衝撃を受けたことを今も覚えています。当たり前すぎて、おかしいのですが、自分が生きている世界が全て(2)だと思っていた子どもにとっては、新鮮な驚きだったのです。

まず最初に、現代でいえば東京スカイツリーや国会議事堂を見物するための旅、都市を見物する旅について、お話ししましょう。古典文学の時代は、旅がさほど簡単ではなかったため、純粋な観光旅行は少なかったものの、(3)地方から上京して、首都の様子を鮮やかに描写する作品が存在しています。

例えば、奈良に首都がおかれていた頃、近代東京のような建築ラッシュの時代がありました。とある旅人がその時代の様子を次のような歌に詠んでいます。

あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり
（『万葉集』巻三・三二八・小野老）

（奈良の都は咲く花が照り輝くように、今真っ盛りです）

作者の小野老は＊詞書に「大宰少弐小野老朝臣の歌一首」とあるように、大宰府の次官でした。何らかの公務で奈良の平城京を訪れたとき、国家建設の勢いに乗る平城京の活気に満ちた様子を目の当たりにして、感慨を込めて詠んだ一首です。「あをによし」の「あをに」は色彩の「青」＊「丹」と言われています。平城京に建ち並ぶ寺院などの建造物の豪華な色彩、勢いある国家の様子が、カメラで撮影した写真のように、鮮やかにとらえられています。

時代が下って、中世になると、鎌倉への旅が流行しました。京都が古くからの都とすれば、鎌倉は新しい首都、ニューシティです。それに伴い、数多くの東海道の旅日記が誕生したのです。

東海道の旅日記の一つである『海道記』は、活気に満ちた新都市鎌倉の様子を観察し、生き生きとした筆致で描写しています。

（由比ガ浜は）数百艘の船、ともに縄をくさりて、大津の浦に似たり。千万宇の宅、軒をならべて、大淀の渡りに異ならず。（『海道記』）

（数百艘の船が綱でつながれ、琵琶湖の大津の浦に似ている。千万軒の家が軒を並べていて、伊勢の大淀の渡りと変わらない。）

（鎌倉市街は）豪を撰び、賢を撰ぶ、門郭、しきみを並べて、地、又にぎはへり。

（『海道記』）

（武勇の者、賢者を選んで住まわせ、門や塀、軒を並べて、この土地もまた賑わっている。）

その後、作者が訪れたのは、大御堂（勝長寿院）、二階堂（永福寺）、鳩宮（鶴岡八幡宮）の三か所です。この三か所が当時の三大観光スポットで、『*東関紀行』の作者も『*とはずがたり』の作者もこの三か所をはずしていません。現在、大御堂と二階堂は、記念碑が建つのみで、観光スポットは様変わりしています。

由比ガ浜も今はサーフィンの聖地となっていますし、これらの描写はどれも*昔日の感があります。しかし、勢いのある都市や賑わう人々を観察し、書き留める紀行文の筆致は、瑞々しい感動に満ちていて、旅の醍醐味を私たちに教えてくれます。

旅先では、普段見慣れていたはずの自然や景物が、新鮮に見えることはよくあることです。

平家全盛期から没落までの時代を生きた、建礼門院右京大夫という女性が、旅先で体験した出来事を紹介しましょう。建礼門院右京大夫は、平清盛の娘で高倉天皇の*中宮となった建礼門院徳子に仕えた女性で、清盛の孫資盛の恋人でもありました。しかし、平家一門は没落し、最後は壇ノ浦（山口県）で滅亡します。徳子は救われたものの出家し、京都大原の寂光院で晩年を過ごします。恋人資盛は壇ノ浦でそのまま戦死してしまいました。愛する人を失った右京大夫は、つらい思い出の詰まった京都を離れ、旅に出ることを決意します。旅といっても、滋賀県の比叡坂本のあたりなので、今の感覚からすると日帰りの外出くらいの距離なのですが、当時の人にとっては日常の生活の場から離れる旅であったわけです。いわゆる傷心旅行ですね。

そんな心細い旅の途中のある晩、彼女は満天の星に遭遇します。日本の古典では、月は数多く扱われてきましたが、星はほとんど描かれてきませんでした。右京大夫は、旅先で見た星空の美しさを次のように描写しています。

十二月一日ごろなりしやらん、夜に入りて雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲騒がしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。ひきかづき臥したる衣を、ふけぬるほど、丑二ばかりにやと思ふほどに、引き退けて、空を見上げたれば、ことに晴れて浅葱色なるに、光ことごとしき星のおほきなる、むらなく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に箔をうち散らしたるによう似たり。今宵初めて見そめたる心ちす。先々も星月夜見なれたることなれど、これは折からにや、ことなる心ちするにつけても、ただ物のみおぼゆ

月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる

（『建礼門院右京大夫集』二五二）

（十二月一日頃だったでしょうか、夜になって、雨とも雪ともなく散って、村雲の往来があわただしく、すっかり曇りきってしまわない

ものの、まばらに星が見え隠れしていた。頭からかぶって寝ていた着物を、夜が更けた頃に、午前二時半くらいかと思う頃に、取り払って、空を見上げると、格別に晴れて薄い藍色で、強い光を放つ星が一面に出ているのがとてもおもしろくて、縹色（薄い藍色）の紙に金箔、銀箔を散らしたものによく似ている。今宵初めて見た気がする。先々も星月夜を見てきたのに、これは旅先だからでしょうか、格別にすばらしい気持ちがするにつけても、ただひたすら物思いに誘い込まれていった。

月だけを眺め慣れてきたけれども、

星の夜の深い感動を今宵初めて知りました）

「丑二ばかり」なので、まさに深夜ですね。ふと眼がさめると、さっきまでの雲が去り、夜空は晴れ渡り、満天の星が広がっていました。空は薄い藍色で、(4)格別に強い光を放つ大きな星が、夜空いっぱいに広がっていたのです。右京大夫はこの星空を「花の紙に箔をうち散らしたるによう似たり」と表現しています。満天の星を、薄い藍色の紙に小さな金箔や銀箔を散らした、書道に用いられる豪華な紙になぞらえたのです。書道展や日本の名品展などに行くと、しばしば目にする紙です。作者は、書道の名門世尊寺家の娘なので、幼い頃から見慣れていた紙だったのでしょう。

彼女は、今夜初めて星空を見たような気がすると言います。京都に星空はなかったのでしょうか。もちろんそんなことはありません。京都でも星は見えます。これまで何度となく星空を見ていたはずなのですが、日常から離れて、今まで見えなかったものが見えたのです。(5)まさにこれが旅の力というものでしょう。これまで夜空といえば月ばかり見てきたけれども、星空の感動、その深い悲しみは、彼女にとっては初めての体験でした。旅先で見る満天の星、幼い頃からなじんできた、あの豪華な紙になぞらえながら、その美しさに強く感動し、深い物思いへと誘われていきます。小さな旅ではありますが、日常から離れた旅先での風景が、新たな発見と深い物思いをもたらしているのです。この旅が、自己回復につながっていったことは間違いありません。

（谷　知子「古典のすすめ」による）

〔注〕
詞書――和歌や俳句の前書き。その作品の動機や主題などを記したもの。
丹――赤い色。
『東関紀行』――鎌倉時代中期の紀行文。作者未詳。
『とはずがたり』――鎌倉時代後期の日記。作者は後深草院二条。
昔日の感――ここでは、「今昔の感」の意味。昔と今とを比べてずいぶん変わってしまったと感じること。
中宮――天皇の妻。皇后。

〔問1〕(1)また、交通機関のめざましい発達によって、昔と今では、旅の様相は大きく変化しました。とあるが、「昔」の「旅」について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　基本的に徒歩だったため、時間がかかり、旅立ちが永遠の別れになることも珍しくなかったことから、楽しいものではなかった。

イ　新しい出会いの発見や驚きを与えてくれるものであったが、大変な危

険を伴ったため、喜びよりも苦労が感じられるものであった。

ウ　時間と労力がかかり、大変な危険を伴うものではあったが、新たな発見や驚き、冒険の喜びや苦労を与えてくれるものでもあった。

エ　人生において新たな発見や驚きを得ることを目的にして、命を脅(おびや)かすほどの危険を冒しても決行しなければならないものであった。

〔問2〕(2)だ　と文法上**異なるもの**を一つ選び、記号で答えよ。

ア　池の周りが静かだ。

イ　練習は三時からだ。

ウ　秋といえば紅葉だ。

エ　この子は私の妹だ。

〔問3〕(3)地方から上京して、首都の様子を鮮やかに描写する作品　とあるが、こうした作品について筆者はどのように述べているか。その内容を次の□内のようにまとめるとき、（　　）に当てはまる最も適切な言葉を本文中から**六字**でそのまま抜き出して書け。

都市や人々の様子が生き生きとした筆致で鮮明に写し取られていて、活気に満ちたものを目にした（　　）が伝わってくる。

〔問4〕(4)格別に強い光を放つ大きな星　とあるが、この現代語訳に相当する箇所を、［　］内の古文の中から**十四字**でそのまま抜き出して書け。

〔問5〕(5)まさにこれが旅の力というものでしょう。とあるが、筆者は、建礼門院右京大夫の場合は、「旅の力」がどのように作用したと考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　旅先で初めて星空を見てその美しさに感動し、星空を見慣れた書道の紙に重ねて幼い頃のことを思い出すうちに、旅の心細さが紛れていった。

イ　旅先で見た星空がこれまで見ていた星空よりも美しいことに気づいて心動かされ、住み慣れた土地を離れる寂しさが期待へと変わっていった。

ウ　旅に出たことで初めて星空の美しさに気づき、その感動に誘われて思いを巡らすなかで、大切な人々を失った深い悲しみが癒やされていった。

エ　旅に出たことで夜空に満天の星が広がっていることに気づき、その美しさに魅了されるとともに、日常から離れたという解放感を味わった。

第 3 回
(11月)

テスト時間	50 分

平均点（都標準）	58 点

問題番号		正答率
1	(1)	94.4
	(2)	46.5
	(3)	55.3
	(4)	89.4
	(5)	45.6
2	(1)	92.6
	(2)	85.7
	(3)	76.7
	(4)	75.5
	(5)	69.9

問題番号		正答率
3	〔問1〕	44.2
	〔問2〕	79.2
	〔問3〕	67.0
	〔問4〕	58.7
	〔問5〕	54.2
4	〔問1〕	43.2
	〔問2〕	27.5
	〔問3〕	28.8
	〔問4〕	69.2
	〔問5〕	4.1点

問題番号		正答率
5	〔問1〕	87.2
	〔問2〕	32.8
	〔問3〕	70.9
	〔問4〕	71.8
	〔問5〕	40.5

注：4〔問5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 彼は試合中俊敏に動く。
(2) 恩師の手紙に返信の筆を執る。
(3) 他人の手を煩わすのは避けたい。
(4) この資料は必要な情報を網羅している。
(5) 密林に生息する生物の濫獲を取り締まる。

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 弟はまだ言動がオサナい。
(2) 古いチソウから土器を発見した。
(3) ノウヤクを使わずに作物を栽培する。
(4) このセーターはヨウモウで編んである。
(5) 図書館でカりた本を期限ぎりぎりに返す。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

小さい頃に母を亡くした心也（俺）は大衆食堂を営む父と二人暮らし。食堂では、貧困家庭の子どもたちのために無料で食事を提供する「こども飯」を行っている。ある日、教室の心也の机に「偽善者のムスコ」と落書きされていた。その日の晩、焼うどんを作ってくれた父に心也は話しかける。

「うちの『こども飯』のことなんだけど」

「……」

背後の父は返事をしなかった。でも、ちゃんと耳を傾けてくれている気配は感じられた。

「そろそろ、やめない？」

ああ、言っちゃったな――、そう思いながら焼うどんを頬張ったら、なんだか少しだけ味がぼやけた気がした。

父は、少しのあいだ何も答えなかった。しかし、ふたたび店のシャッターがガタガタと音を立てたとき、いつもと変わらず野太くて、でも、いつもより少し穏やかな声で言った。

「学校で、何か言われたのか？」

俺の脳裏に、あの汚い落書きの文字がちらついた。

「別に、言われたわけじゃないけど」

嘘はついていない。言われたのではなくて、書かれたのだ。俺は心のなかで自分自身に屁理屈を言っていた。すると、

(1)「くくくく」

と、父が笑い出した。

「なに？」
俺は箸を手にしたまま、思わず後ろを振り向いた。
「ほんとお前って、昔から嘘が下手なのな」
「は？　嘘なんて――」
「まあ、いいけどよ」父は美味そうにビールをごくごく飲んで、「ちょっと想像してみろよ」と言った。
「想像？」
「ああ。『こども飯』をやめた俺と、その後の食堂をイメージしてみろって」
「……」
「しかも、自分から進んでやめたんじゃなくて、どこぞの部外者の言葉に屈して『こども飯』サービスをあきらめた俺と、子どもたちが来なくなったこの食堂と、そうなった店に学校から帰ってくる自分のこともな」
(2)想像をしかけて、すぐにやめた。まじめに想像をするまでもない。というか、すでに胃のあたりが重くなっていたのだ。
俺が、何も答えられずにいると、ふいに父はやわらかい目をした。
「なあ心也、死んだ母ちゃんは賢かっただろ？」
「え？」
「その母ちゃんが、言ってたんだ」
「……」
「人の幸せってのは、学歴や収入で決まるんじゃなくて、むしろ『自分の意思で判断しながら生きているかどうか』に左右されるんだって」
「……」
「あ、お前、その目は疑ってるな？」
「いや、べつに」
「いまのは俺の言葉じゃなくて、本当に母ちゃんの言葉だからな。しかも、国連だか何だかがちゃんと調べたデータらしいぞ」
「分かったよ、それは」
「よし。てなわけで、死んだ母ちゃんの教えどおり、俺は自分の意思を尊重しながら生きる。やりたいようにやる」
父はニヤリと笑って、ビールをあおった。
「……」
(3)なるほど、やっぱり俺の意見は流されることか。
そう思ったら、言葉にならないもやもやが胸のなかで膨らみはじめた。
俺はふたたび父に背中を向けた。そして、黙って焼うどんを口に運んだ。少し冷めてしまった麺は、さっきよりも粘ついていて、風味も落ちた気がした。それでも、かまわず食べ続けた。
すると、背後で、また、コツン、という乾いた音がした。
父がビールのグラスを置いたのだ。
「ちなみに、だけどな」
穏やかな父の声を、俺は背中で撥ね返そうとして無視をした。でも、父はかまわず言葉を続けた。
「心也が不幸になると、自動的に俺も不幸になっちまう」
「……」
「だから、心也が不幸になるんだったら、俺は『こども飯』をやめるよ」
「……」

「それが、やりたいようにやると決めている俺が、自分で決めた意思だ」
咀嚼（そしゃく）した焼うどんを飲み込んだ。
(4)店内がふたたび静かになって、時計の秒針と雨の音がやけに大きく聞こえはじめた。
なんだよ。マジかよ。やめるのかよ。
俺に、胃が重くなるような未来を想像させておいて、やめるのかよ——。
そもそも自分からやめて欲しいと言ったのに、いざ父が賛成してくれたら、それにも不平を言いたくなって、胸の奥のもやもやがむしろ一気に膨張してきた。正直、少し息苦しいほどだった。それでも、俺は、焼うどんを頬張った。そして、いつもよりしっかりと噛（か）んだ。(5)背中に父の存在を感じると鼻の奥がツンとしてきそうだったから、必死に噛むことに集中したのだ。
やがて、静かすぎる店のなかで、俺は焼うどんを完食した。
皿の上にそっと箸を置き、背中越しに言った。
「ごちそうさまでした」
少し、声がかすれてしまった。
「おう、美味かったか？」
母がいなくなってから、何度も、何度も、父と俺のあいだで交わされてきた短い言葉のやりとり。
ちょっと腹が立つから、今日くらいは*イレギュラーな返事にしてやれ、と俺は思った。
「まずかった」
ぽつりと言ったら、背後で父が吹き出した。
「あはははは。心也、お前なぁ——」
「……」
「ほんと、死んだ母ちゃんによく似てるわ」
俺はあえて振り返らずに、空になった皿を見下ろしていた。
すると父が、ますます愉快そうに続けた。
「母ちゃんも、お前も、嘘をつくのが下手すぎなんだよなぁ」
その言葉に肩の力が抜けて、フッと笑いそうになった瞬間、なぜか同時に鼻の奥が熱くなってしまって……、それから俺は、しばらくのあいだ後ろを振り向けなかった。

（森沢明夫「おいしくて泣くとき」による）

〔注〕イレギュラー——変則なこと。不規則なこと。

〔問1〕(1)「くくくく」と、父が笑い出した。とあるが、この時の父の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　学校で何か言われたから「こども飯」をやめたいと言ったわけではなく、何かを書かれたから言ったのだと心也の雰囲気から気づいた様子。

イ　「こども飯」をやめないかという提案はしているものの、心也が本当に伝えようとしていることは他にあるのだということがわかった様子。

ウ　心也の受け答えから、「こども飯」をやめないかと自分自身の強い思いから切り出したのではないということをあっさりと感じ取った様子。

エ　心のなかで他人のせいにしてはいるものの、「こども飯」をやめたいという本心をきちんとぶつけてきた心也の成長を見逃さなかった様子。

〔問2〕(2)想像をしかけて、すぐにやめた。とあるが、このときの心也の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　自ら言い出しながら、意に反して「こども飯」をやめたあとの食堂や自分たちの状態が現実になることを受け入れられなくなっている様子。

イ　「こども飯」をやめたあとの食堂や自分たちの状態について想像を促す父の真意がつかめず、まじめに想像するべきなのか戸惑っている様子。

ウ　そもそも「こども飯」をやめることを提案したのは自分なので、やめたあとの食堂や自分たちの状態についても想定済みだと気づいた様子。

エ　これまでやってきた、「こども飯」をやめたあとの食堂や自分たちの状態について、どうなるのかがまったくわからなくて困惑している様子。

〔問3〕(3)なるほど、やっぱり俺の意見は流されるってことか。とあるが、このときの心也の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　「こども飯」をやめたほうがいいということは少なからず感じているにもかかわらず、聞く耳を持とうとしない父の態度にがっかりしている。

イ　「こども飯」という大事な話題を持ち出したときに、父が心也とどのような接し方をするのかを冷静に分析し、今後にいかそうと思っている。

ウ　「こども飯」をやめるかどうかはともかく、心也の意見を検討もせずに自分の意思を通すことを宣言する父の様子にいらだちを覚えている。

エ　「こども飯」のことをあきらめようとしない父の様子から、「こども飯」に対する父の強い思いを感じることができて胸が熱くなっている。

〔問4〕(4)店内がふたたび静かになって、時計の秒針と雨の音がやけに大きく聞こえはじめた。とあるが、この表現について述べたものとしてのうちではどれか。

ア　父にはっきりと思いを伝えられない心也と、自分の考えを話し続ける父の様子を、時計と雨のかみ合わない音で比喩的に表現している。

イ　父から放たれた言葉に対する心也の驚きや戸惑いを、聴覚がとらえるものだけで時間の進行を描くことによって印象的に表現している。

ウ　父と心也が意識する、「こども飯」をやめたときに店内がどのような静けさになるのかを、時間の経過とともに具体的に表現している。

エ　父が思いを伝えて落ち着いたのに対し、心也が心を騒がせている様子を、店内の静かさとそこに響く音によって象徴的に表現している。

〔問5〕(5)背中に父の存在を感じると鼻の奥がツンとしてきそうだったから、必死に噛むことに集中したのだ。とあるが、心也が「背中に父の存在を感じると鼻の奥がツンとしてきそうだった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　父が考えに賛成してくれると不平を言いたくなってしまう自分自身の気持ちがよくわからなくて、父に対する申し訳なさを感じていたから。

イ　父に不平を言いたくても言えずにもやもやしている息苦しさから解放されたくて、思いのたけを伝えてしまいそうな衝動に駆られていたから。

ウ　「こども飯」をやめないと言ったのに今度はやめると言い出す父のいい加減さに触れ、どうしようもない情けなさがこみあげてきていたから。

エ　心也が不幸になるかどうかを、「こども飯」をやめるかどうかの判断基準にしているという父の愛情を知り、胸がいっぱいになっていたから。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

二〇世紀中ごろまでの＊SFに見られたような、ロボットの古典的なイメージは、その極限においては、人間と同等の知性を有する、あるいはそれ以上の知性を有する、人間と同じ姿をした機械、というものでした。そしてそこまでいかなくとも、人間による外からの直接の指令なしに、自立して動き回れる程度の自己制御能力を備えた機械、というものでした。そしてその対極にあるもうひとつのロボットイメージが「人間が遠隔操作する機械」です。こちらは「＊マニピュレーター」と呼んだほうがよいかもしれません（『マジンガーZ』『機動戦士ガンダム』といった日本のアニメーションによって大衆的に普及したイメージ、人間が直接搭乗して動かす、ヒト型の乗り物としての「（巨大）ロボット」は、両者の非常に奇妙な＊アマルガムです）。しかし今日われわれが、すでに無人兵器などにおいて実現しつつあるのは、そのどちらでもありません。それはネットワークに常時接続されており、それ一個での自律性は大して持っていません。しかしながらそれは古典的な遠隔操作機械ともまた違います。古典的な遠隔操作機械は、＊オペレーターたる人間の身体の延長であり、つまりは非常に複雑精妙な「道具」でした。現代の遠隔操作機械は、たとえ単独の主操縦者がいたとしても、操縦者と機械の間の接続はインターネットを経由してのものであり、情報の授受、出入力もはや操縦者との間でのみ行われるものではありません。機体のセンサーを通じての情報に基づき、操縦者は判断を下し、機械に「こう動け」と命令を下すわけですが、センサーからの情報は操縦席にのみならずネットワークの別の場所にある情報集積・管制センターにも同時に送られ、そこからの＊フィードバックをも受けて最終的に作動するのであって、決して操縦者の意のままになるわけではないのです。（第一段）

このような、グローバルなネットワークの端末としてのロボットとどのようにつきあっていくのか？　今日のロボット・人工知能倫理学の主要課題のひとつは、このようなものです。今日のインターネットは、かつてのような人間が操作するコンピューター同士の連結、というより道具としてのコンピューターを用いた人間同士のコミュニケーション・ネットワークを主体とするものから、ロボット、自動機械同士の連結――いわゆる＊IoT――を軸とするものへと変貌しつつあります。そのようなネットワーク技術の発展が、人間社会にどのように影響を与えていくのか、またそうしたネットワークをどのようにコントロールしていくのか？　これが非常に深刻な課題なのです。（第二段）

わかりやすいところで、Ａｍａｚｏｎをはじめとする＊ｅコマースの顧客管理のことを考えてみましょう。Ａｍａｚｏｎのレコメンド（おすすめ機能）は、かつてであれば人間にしかできなかったような、顧客の好みやライフスタイルを類推して、買ってもらえそうな商品を提案する、という機能を、機械学習、統計的情報処理の自動化によって機械化しています。(1)このような技術革新の方向は、言うまでもなくわれわれのライフスタイルを、そして社会のありようを大きく変えていくでしょう。（第三段）

これまで、私たちにとっての買い物、ショッピングのふつうのあり方は、店頭なりカタログなりで商品を見比べ、自分の好みや価値観、そして経済状況などと照らし合わせつつ、何を買うかを決断し、選択する、というものでした。売り手の側も広告を含めたさまざまな手練手管を駆使して、顧

客の選択に影響を与えようとしてきました。その延長線上に、Ａｍａｚｏｎのレコメンド機能は位置しています。しかしながらその発展は、あとひと押しで、ただたんに顧客の選択に影響を与えるとか、あるいは操作するとかいった域を超えて、新たなレベルに入り込もうとしています。どういうことでしょうか？（第四段）

たとえば私たちは生活必需品、というより文字通りの「生命線（ライフライン）」として、水道や電気、都市ガスの供給を必要としており、また電話、そして今日ではインターネットのサービスも必要としていて、それらを代金を払って購入しています。(2)しかしそうした買い物は、普通の意味での買い物とは違います。同じく生活必需品とは言っても、食糧、食材を買うときには、われわれはその都度その都度の意図的な選択をベースとしている場合が多いでしょう。その日のおかず、お惣菜（そうざい）を店頭で、あるいは家で料理するための食材も、その日のメニューに合わせて個別に買います。しかし水道水や電気・ガス、あるいは電話・インターネットはそういうものではありません。もちろんそこでも、とくに民営化・市場化の波が訪れてからは、複数の業者間の競争があり、選択が行われます。しかしそういう選択も、せいぜい契約する業者の選択であって、個別のサービスの選択ではありません。たとえば今日はＡ社の水を買い、あすはＢ社だとか、今回の通話はＸ社だけど、次回はＹ社にするとか、そのような意味での選択的買い方はしません。特定の業者と一定期間契約したら、その期間はそのサービスを使いっぱなしです。もちろん使用量に応じて、支払う代金が変化することはありうるとしても。（第五段）

Ａｍａｚｏｎのレコメンド機能は、そのようなライフライン、公共性の高い*インフラストラクチャー・サービスの購入行動に非常に似通ったものに、普通の買い物、従来であればその都度その都度の選択を中心にしてきた購買行動を作り替えていく可能性があります。すでにその方向に大きく一歩を踏み出しているのが、音楽・映像ソフトの*ストリーミングサービスです。コンピューターの高速化、*メモリの大容量化、*通信の広帯域化によって、音楽・映像ソフトの流通形態が、ひと昔前のテープやディスクなどの物理的記録媒体への*パッケージ化ではなく、通信回線を通じてのものへとシフトしています。その中でソフト供給業者たちは、取引の基本を、かつてならひとつの記録媒体にパッケージ化された個別の作品の選択的取引ではなく、ライフラインの供給サービスのように、一定期間・一定容量での供給業者との通信を丸ごと購入させる、という方向へとシフトさせていっています。とはいえ音楽・映像ソフトは電気・ガス・水道、あるいは電話・通信サービスなどとは異なり、個別の作品はいずれも個性が強く、どれも一緒の同質な*コモディティ（電気・ガス・水道はもとより、穀物や鉱物などもコモディティの典型です）ではないため、このような一括取引にはなじみにくいところがあります。(3)そこでものをいうのがレコメンド機能です。顧客との取引データを大量に集積し、それを基に顧客の嗜好（しこう）を推測して、顧客の選択に先んじて業者の側から、顧客が好みそうなアイテムを提案するのです。この仕組みが発展していけば、顧客の選択に影響を与える、どころか、それを全体として業者が先取りすることによって、顧客を選択から解放することさえ可能になるのではないでしょうか？（第六段）

もともとは書店から出発したはずが、いまや書籍や音楽・映像ソフトは

おろか、消費者が欲するようなものであればなんでも――それこそ食料品さえ供給するようになったAmazonをはじめとするeコマース業者は、このような音楽・映像ソフトのストリーミングで成功しつつあるモデルを、ソフトではなくハードな実体のある商品にまで広げていこうとしています。つまりは、食料品で言えば、日々の献立を提案し、それに必要な食材を自動的に買い付ける、といったサービスまで展開しかねないところに来ているのです。つまり、従来は基本的には消費者の自由意志に基づく選択によって行われていた「買い物」の構造を作り替え、消費者の選択を不要とする方向へと、eコマースは向かいつつあります。これがいわゆる*「サブスクリプション」です。（第七段）

このようないわばソフトで快適な管理社会化を、どこまで進めてよいのでしょうか？　そこには利益と裏腹の危険や副作用もあるのではないでしょうか？　あるとしたら、どのような？　またそれに対処するために、どのような法的、政策的枠組みが必要でしょうか？　今日の人工知能倫理学の中心的課題のひとつは、このようなものです。（第八段）

（稲葉振一郎「銀河帝国は必要か？」による）

〔注〕　SF――サイエンスフィクション。

マニピュレーター――遠隔操作装置。

アマルガム――この場合は、融合したものの意。

オペレーター――機械を操作する者。

フィードバック――出力結果を入力側に戻し、調整すること。

IoT――あらゆる物がインターネットを通じてつながることによって実現する新たなサービス、ビジネスモデル、またはそれを可能とする要素技術の総称。

eコマース――インターネットを介して受発注や決済、契約などの商取引を行うこと。

インフラストラクチャー――インフラ（社会的経済基盤と社会的生産基盤とを形成するもの）。道路・港湾・鉄道・通信情報施設・下水道・学校・病院・公園・公営住宅などの社会基盤となるもの。

ストリーミングサービス――インターネット上の動画や音声などのデータをダウンロードしながら同時に再生するサービス。

メモリ――コンピューター本体の、情報を記憶しておく場所。

通信の広帯域化――アナログ回線において、データの伝送に用いられる周波数の幅を広くすること。これによって多量の情報を送ることが可能になる。

パッケージ化――複数の商品を一つにまとめること。

コモディティ――商品カテゴリーの中で、機能や品質による差異が減少し、商品価値が普遍化されること。誰がそれらを生産したのかに関係なく、市場はその商品（電気・ガス・水道など）の価値を同等として扱うこと。

サブスクリプション――商品を所有するのではなく、一定期間

利用できるサービス。商品そのものではなく利用できる期間に代金を支払う。

問題〔第3回〕

〔問1〕 この文章の構成における第二段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 前段で述べた、人々が抱く多様なロボットのイメージをふまえ、筆者の考えるロボットの活用方法を列挙しながら詳しく分析している。

イ 前段で述べた、ロボットの詳しい操作方法について、現在考え得る具体的な課題を示すことによりその解決方法の説明につなげている。

ウ 前段で述べた、かつてのロボットと現在のロボットの違いに関し、その認識の根拠となる具体例を示して自説の妥当性を強調している。

エ 前段で述べた、ロボットの古典的なイメージと実際との違いを受けて、論点を整理することで詳しい現状認識へと論の展開を図っている。

〔問2〕 (1)このような技術革新の方向は、言うまでもなくわれわれのライフスタイルを、そして社会のありようを大きく変えていくでしょう。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 道具としてコンピューターを用いることによって、広告も含めたさまざまな方法をいかして顧客の商品購入も操作できると考えているから。

イ ネットワーク技術が発展していくことによって、買い物において顧客が選択することすら必要のない社会になりつつあると考えているから。

ウ 人間にしかできなかったことが機械化されることによって、店頭で商品を比べることなく顧客が買うものを選択できると考えているから。

エ 機械学習、統計的情報処理の自動化などが進むことによって、何を買うかを顧客が選択する際の判断材料に影響が及ぶと考えているから。

〔問3〕 (2)しかしそうした買い物は、普通の意味での買い物とは違います。

とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　「生命線」としてのサービスは、誰もがその供給を必要として、代金を払って購入するのが当然だと考えている点で、その都度代金を払うかどうかを考える、食材などの買い物とは違うということ。

イ　文字通りの「生命線」として必要とされる、水道や電気などのサービスは業者の側がサービスを提供するかどうかを選択するが、食材などの買い物は、購入者が商品を個別に購入するために違うということ。

ウ　サービスそのものに選択が必要なく、対価を払えば期間中にサービスを受け続けられる「生命線」に関するものと、選択したものの対価を払って商品を購入する、食材などの買い物とでは違うということ。

エ　同じ生活必需品であっても、「生命線」に関わる水道や電気のようなものは複数の業者間の競争に個人の意図は関係しないが、食材などの買い物は、その都度意図的な選択が行われるために違うということ。

〔問4〕(3)そこでものをいうのがレコメンド機能です。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　商品ごとに特徴が大きく異なる音楽・映像ソフトでは、顧客の嗜好に合うと考えられる商品を知らせてくれる仕組みが効果的だということ。

イ　音楽・映像ソフトは個性が強いため、大量に集積されたデータの中から個性的なものを排除して、同質にする仕組みが必要になるということ。

ウ　どれも同質なサービスとは異なって音楽・映像ソフトは一括取引に合わないことなど、欠点の存在を指摘する仕組みが役に立つということ。

エ　一括取引にはなじみにくい音楽・映像ソフトに関して、顧客から好みのアイテムを業者に伝えられる仕組みの発展が待たれているということ。

〔問5〕　国語の授業でこの文章を読んだ後、「技術革新による変化」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「　などもそれぞれ字数に数えよ。

5 次の文章は『万葉集』の和歌とそれについて述べたものである。これを読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

(1)馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも吾はふたり行かむ

読み人知らず（巻十三・三三一七）

この歌は戦時中から愛されてきた歌で、歳月を経ていまもなお、人々に好もしがられ、たいていの「万葉集抄」には入れられている。

巻十三は長歌集ともいうべく、ほとんど＊長歌と反歌で成り立っている。歌の作られた年代は分からないし、作者も知れないが、しかし人なつかしい、よくわかる歌が多い。

作者不明というのは、民衆の共有財産ということでもあろう。この「馬買はば……」も、ひょっとしたらそのころの人々が愛した流行歌だったのではないか。みんなが歌い継ぎ、歌い弘めていったのではあるまいか。

(2)この歌は、これだけで独立できない。たぶん「萬葉百首」を選んだ人々も、その前の長歌を背景にしつつ採ったと思われるので、ここへ掲げてみよう。

「つぎねふ　山背道を　他夫の　馬より行くに　己夫し　徒歩より行けば　見るごとに哭のみし泣かゆ　其思ふに　心し痛し　(3)たらちねの　母が形見と　わが持てる　真澄鏡に　蜻蛉領巾　負ひ並め持ちて　馬買へ＊わが背」

そしてこの長歌に対し、「或る本の反歌に曰はく」として、

(4)「真澄鏡持てれどわれは験なし君が徒歩よりなづみ行く見れば」

と、「馬買はば」の二首があげられているのである。

〈山城への道を（「つぎねふ」は山城の枕詞）よその夫は馬で行くのに、馬を持たない私の夫は歩いて行くのです。石ころ道、山道、さぞ足を痛め、くたびれることだろうと思うと見るたびに泣けてくるのです。切なくて心が痛みます。お母さんの形見として私が大事にしている、真澄鏡に、あきつ領巾を添えて持っていって、それで馬をお買いになって下さい、ねえあなた……〉

真澄鏡はよく磨かれた白銅の鏡、あきつ領巾は、とんぼの羽のように薄く透ける領巾。古代の女たちは、さまざまな色の領巾をうなじから肩へかけ、腕にまつわらせているのを私たちは絵などで見る。領巾は別れに臨んでうち振られ、わが想いと魂を相手に伝える＊物代ともなった。鏡も領巾も、ともに女の持ちものの中では＊愛惜するもの。貧しい暮らしの中で、妻は母の形見をどんなに大切にしていたであろうか。

それを持っていって馬を買え、と夫にすすめるのであった。「真澄鏡持てれどわれは験なし君が徒歩よりなづみ行く見れば」と彼女は言葉を強めていう。

真澄鏡を持っていても、私はそれを喜ぶ気になれないの。あなたが徒歩で難渋していらっしゃると思うと。

それに対して夫が答えたのが「馬買はば」であった。

〈私が馬を買ったとしても、お前は歩いていかなければならないじゃないか、いいよ、いいよ、かまわない、石を踏んでも私たちは二人で歩いていこうよ〉

この夫はなかなかユーモアのセンスがある。妻が思いつめた表情で夫婦

愛を*発揚したとき、それを機智と*諧謔でもって大らかに返し、妻の申し出よりもっと大きな愛のプレゼントで報いている。

たとえばこれを、妻の言葉通りにして馬を買ったら、それは献身の毒気に中(あ)てられてしまうことになり、愛はやや、腐臭をたてはじめるであろう。夫はかなりそのへんの愛のからくりの洞察に長(た)けた男で、〈おれが馬に乗ったら、お前は歩かなければならないじゃないか〉というのは話をユーモラスにはぐらかしたのである。山城路(やましろじ)をつねに歩いてゆくのは夫の側のみなのだから。

たとえ石を踏んでも二人で歩いていこうよ、というのも、抽象的な表現で、夫は妻が鏡と領巾を日常愛着しているのを、ようく知っていた。

こういう男のやさしい一言で、女はどんな困難にも堪えることができる。これを男の可愛(かわい)げという。

女から見て〈泣かせますなあ〉というような男の歌。

(5) 日本の女たちは千二百年にわたって、男のこういう可愛げを珍重し、賞(め)でてきたのだ。

（田辺聖子「田辺聖子の万葉散歩」中央公論新社　による）

〔注〕 長歌と反歌――長歌は五音と七音の二句を交互に三回以上繰り返し、最後に也音を添えるもの。普通、長歌の後に、長歌の意を反復・補足または要約した短歌である反歌を一首ないし数首詠(よ)み添える。

領巾(ひれ)――古代の服飾具の一つ。女性が首から肩にかけて左右に垂らして飾りとした。

わが背――女性が自分の夫・恋人・兄弟などを親しみを込めて呼ぶ言葉。

験(しるし)――効き目。努力に見合うだけの効果。

物代(ものしろ)――この場合は、「代わりの物」の意と考えられる。

愛惜(あいせき)――愛して大切にすること。

発揚――精神や気分が高まること。

諧謔(かいぎゃく)――滑稽味のある気の利(き)いた言葉。ユーモア。

〔問1〕 (1) よしゑやし　を現代仮名遣いで書いたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　よしいやし
イ　よしうやし
ウ　よしえやし
エ　よしるやし

〔問2〕 (2) この歌は、これだけで独立できない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　作者が「馬買はば」の歌を作るきっかけとなっている、長歌やそれをふまえた反歌も含めて味わうことによって真意が伝わると考えたから。

イ　流行歌として「馬買はば」の歌が認知されているということは、「馬買はば」の歌は作者ひとりのものではなくなっていると考えたから。

ウ　長歌集とも言える作品の中で、民衆の共有財産となっているからといって、「馬買はば」の歌を特別扱いすることはできないと考えたから。

エ　「馬買はば」の歌は、「万葉集抄」や「萬葉百集」を選んだ人々が長歌

と結びつけたことにより意味を成すようになったのだと考えたから。

〔問3〕(3)たらちねの　母が形見と　わが持てる　真澄鏡に蜻蛉領巾　負ひ並め持ちて　とあるが、この部分について本文の筆者はどのようにとらえているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　夫に対する愛情を見せる妻であるが、母に対する思いの強さはそれ以上であるということがわかる部分だととらえている。

イ　夫は馬を持たないのに対し、妻は馬と交換できる品物を持っているという夫婦間の格差を示している部分だととらえている。

ウ　夫に対する愛情を示すために大切なものを手放すふりをし、実際は止めることを妻が期待している部分だととらえている。

エ　夫のことを思いやり、自分にできる限りのことをしなければという妻の献身的な姿勢が読み取れる部分だととらえている。

〔問4〕(4)真澄鏡持てれどわれは験なし君が徒歩より行き見れば　とあるが、同じ万葉集に収められている次の歌のうち、これと同様に妻から夫に向けて歌っているものはどれか。なお、【　】内は現代語訳である。

ア　我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我は見つつ偲はむ
（巻二十・四三二七）

【私の妻の絵でも描くほどの時間があったなら旅に出る私はそれを見て偲べるのに。】

イ　防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思ひもせず
（巻二十・四四二五）

【防人に行くのは誰の夫なのと聞いてくる人を見るうらやましさよ、何も思い悩むこともなく。】

ウ　信濃路は今の墾り道苅りばねに足踏ましむな沓履け我が背
（巻十四・三三九九）

【信濃路は近頃できたばかりの新道。鋭い切り株で足を踏み抜いたりしないで、沓を履いてください、あなた。】

エ　幸ひのいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が声を聞く
（巻七・一四一二）

【ああなんと幸せなのだ、黒髪が白く染まるまで妻の声を聞くことができる人は。】

〔問5〕(5)日本の女たちは千二百年にわたって、男のこういう可愛げを珍重し、賞でてきたのだ。とあるが、「男のこういう可愛げ」について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　ユーモアによって相手の気持ちをほぐすことによって、困難に堪えさせようという本心を女性に気づかせないような歌を作ること。

イ　実際にはあり得ない状況を仮定として示し、話をはぐらかしつつも、女性の思いを受け止めていることがわかるような歌を作ること。

ウ　最悪の事態に至ることのないように十分な配慮をしていることに気づかせ、女性にも苦労をさせることを暗に伝える歌を作ること。

エ　思いつめた様子に対して正面から向き合おうとはしないものの、のちに大きなプレゼントをすることを予告するような歌を作ること。

第 4 回
(12月)

テスト 時　間	50 分

平均点 (都標準)	57 点

問題番号		正答率
1	(1)	78.9
	(2)	52.2
	(3)	54.2
	(4)	47.1
	(5)	43.8
2	(1)	84.8
	(2)	46.1
	(3)	69.2
	(4)	32.6
	(5)	52.4

問題番号		正答率
3	〔問 1〕	84.3
	〔問 2〕	26.3
	〔問 3〕	76.6
	〔問 4〕	75.3
	〔問 5〕	57.2
4	〔問 1〕	39.1
	〔問 2〕	26.1
	〔問 3〕	70.4
	〔問 4〕	66.8
	〔問 5〕	3.7点

問題番号		正答率
5	〔問 1〕	36.1
	〔問 2〕	41.3
	〔問 3〕	56.9
	〔問 4〕	77.3
	〔問 5〕	66.6

注：4〔問 5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 渓谷に沿って歩く。
(2) 今回の件は甚だ遺憾である。
(3) チームの連帯意識が希薄だった。
(4) いよいよ雌雄を決するときがきた。
(5) これから進むべき道について思い惑う。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 失敗したことを気にヤむ。
(2) オウボウな発言を注意する。
(3) 事業に多額な資金をツイやす。
(4) 先生から辞書をハイシャクした。
(5) 彼はオンコウな性格で皆に好かれる。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「大学四年生の「私（夏花）」は必死に就職活動をしていたが、内定を一つも取れず、泣きたくなるほど追い詰められていた。

「ああっ、しまった！」

東京の外れにある小さな製造会社の面接に向かう電車の中で、つり革につかまって『面接に成功するコツ読本』を片手で広げていた私は、突然大声を出してしまった。

車内の視線がいっせいにこっちを向いた。(1)私はあわてて首をすくめた。平静を装ったつもりだったが、心臓が胸から転がり落ちそうなほどバクバクして、気が動転してしまった。

八月六日は母と私にとって、とてもとても大切な日。広島の「原爆の日」であり、母が私を産んだ日。つまり、私の誕生日。

毎年欠かさず、朝、母と私は平和記念公園へ出向き、原爆死没者慰霊碑に向かって手を合わせた。

私が生まれたのは、三十二回目の原爆の日。母が二十二歳のときのことだ。

ものごころがついてからは、この日が自分の誕生日であることに複雑な思いでいた。喜んではいけないような気がした。けれど、毎年、母は、慰霊碑への祈りを済ますと、にこっと笑って私に言った。

――夏花、お誕生日おめでとう。生まれてきてくれて、ほんまに、ありがとう。

そして、その日ばかりは夜更かしして、私は母の帰りを待ちわびた。い

つも「*広(ひろ)さん」のお好み焼きと特大のショートケーキを持って帰ってきてくれたから。

大学生になって上京してからも、この日は広島で迎えた。二十歳の誕生日は、「広さん」で初めてビールで乾杯した。お好み焼きとビール、合わせるとこんなにおいしいとはー！　とすっかりビール党になってしまった。

残念ながら、好きな人と迎えたことはまだ一度もなかった。それでも、底抜けに明るい母と、「広さん」の仲間たちと、帰省中の友人たちと一緒に迎える誕生日は、楽しく、うれしく、幸せだった。

(2)それなのに――。

就職が決まらない、と私は毎週母に電話してぼやいていた。母が月に一度送ってくれる仕送りの現金書留の中に必ずテレホンカードと翌月の勤務のシフト表が入っていた。それを確認して、母が休みの日には必ず電話をした。東京と広島をつなぐ電話は瞬(またた)く間にカードの残数が減ってしまう。だから長話はできなかったけど、早く就職先を決めたい、だから夏休みもそれが決まるまで帰れないと、早口で母に告げた。母は、ふんふん、とひと通り私のぼやきを聞いてから、決まって明るく言うのだった。

――焦(あせ)りんさんな、そのうち決まるけん。大丈夫じゃて。

そう言われると、そうかなあ、とほんの少し安心するのと同時に、お母さんにはわからんよ、就職活動したことないんじゃけえ、と反発する気持ちも頭をもたげるのだった。

……にしても。

必死に就職活動をするあまり、自分の誕生日のことなんかすっかり忘れていた。母も遠慮したのか、つい三日まえの電話では、「帰っておいで」とはひと言も言わなかった。

――大事な日なのに。何やっとるんじゃろ、あたし。

その日の面接は上の空だった。一礼をして面接室を出たとき、もうだめだ、と泣き出しそうになった。たまらなくなって、そのまま、東京駅へ向かった。

毎月五日に支給されるアルバイト代が銀行口座に入っていた。それを引き出して片道の学割切符を買い、広島行きの新幹線に乗り込んだ。車窓を流れゆく風景は、高層ビルの森から青々とした稲田に移り変わっていく。

(3)頭の中は空っぽで、そよとも風は吹き抜けなかった。

広島駅の改札を出ると、いっぱいの茜空(あかねぞら)が私を迎えてくれた。お正月に帰省して以来、七ヶ月ぶりのふるさとだった。

広島にとって特別なこの日、おごそかな空気が街を満たしていると感じるのは、私ばかりではないはずだ。広島に暮らす多くの人たちが、この夏のいちにちの濃い空気を共有しているのだ。私は子供の頃からこの日の空気を敏感に感じ取って、なんとなく背筋が伸びる気持ちがしたものだ。そして、私の母は、いつもこの日を母娘ふたり、無事に迎えられたことを喜ぶのだ。

私はまっすぐに「広さん」へ向かった。店は広島市の中心地にある繁華街・新天地にある。夕方六時の開店前には行列ができ、夜八時過ぎまで行列が途切れることはない。その日もすでに十人ほどが店のまえに列を作っていた。

中学生になってからは、よっぽどのことがない限り勤務中の母を訪ねることはなかったが、誕生日だけは特別で、閉店間際(まぎわ)にのれんをくぐった。

(4)

すると、待ち構えていたように、母が、ほい来た！　と笑顔を投げてくる。そのボールはすとんとまっすぐに私の胸のミットに収まった。続いて広さんが、なっちゃん、お誕生日おめでとう！　と叫び、ハッピー・バースデー！　とスタッフ全員、声を合わせて、拍手で出迎えてくれるのだった。私は照れくさく、でもうれしく、肩をすくめて、いっぱいの笑顔の中へ入っていく。それが私の誕生日のいつもの風景だった。

私は行列の最後尾に並んだ。暑い夏のいちにちの終わり、宵風がのれんをかすかに揺らしている。のれんの中からはなつかしい熱気があふれ出ていた。

三十分ほどして、私はようやく入り口のまえに立った。のれんの隙間から店内の様子がうかがえる。長いカウンター席、奥にテーブル席がある。お客さんたちはビールを酌み交わし、お好み焼きをつついている。おいしそうな顔、楽しそうな顔。はじける笑顔。どの顔も幸せそうだ。

カウンターの中では、大将の広さんがどんどんお好み焼きを焼いている。そしてその隣の母。焼きあがったお好み焼きを次々にお皿に載せ、鉄板をきれいにし、具材を準備する。「はい、一番さん上がり！」「はいよ、一番さん！」と、広さんとの掛け合いもテンポよく、てきぱきと立ち回っている。

母は色黒で頬骨がくっきり、化粧っ気もゼロ。全然美人じゃない。よれたシャツは汗だくで、貧相な体に張り付いている。遠目に見ると、まるでおっさんみたいだ。それでも、母の笑顔は不思議にまぶしかった。

どうしてだろう、ふいに涙がこみ上げた。(5)私のまえに並んでいた人がのれんをくぐったとき、私はくるりと向きを変えて走り出した。

〔注〕広さん――母親が勤めるお好み焼き屋の屋号。店主は「広さん」と呼ばれ、「私」の大学の入学金を貸してくれた人物。

（原田マハ「ハッピー・バースデー」による）

〔問1〕(1)私はあわてて首をすくめた。とあるが、このときの「私」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　本を読んでいる最中に突然大声を出してしまった事実を反省する一方、状況の変化に対して敏感に反応する車内の人々の感覚にあきれる様子。

イ　大声を出したせいで面接が意識から離れかけた一方、視線が集まっている状況が面接の様子を思い出させ、改めて気を引き締めている様子。

ウ　大切な日を忘れていたことに気づいて焦る一方、さしあたって自分に車内の視線が集まっている現状をやり過ごすことを意識している様子。

エ　ちょっとした物忘れにうろたえる一方、視線が集まっていることで車内中から責められているように感じていたたまれなくなっている様子。

〔問2〕(2)それなのに――。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　母と過ごす誕生日を楽しみにしていたのに、電話をした際に母から誕生日に帰ってくるように言ってもらえなかったことを悲しむ気持ち。

イ　毎年のように幸せな誕生日を過ごさせてくれたことを考えると、就職のことについて母にぼやいてばかりの日々を申し訳なく思う気持ち。

ウ　毎年楽しい誕生日を迎え、生活を充実させることができていたのに、就職はまだ決まらないという事実がどうしても納得できない気持ち。

エ　自分の誕生日がいつも素晴らしい一日だったことを思えば思うほど、そんな日が頭から抜け落ちていたということが信じられない気持ち。

〔問3〕(3)頭の中は空っぽで、そよとも風は吹き抜けなかった。とあるが、このときの「私」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　誕生日を忘れていた事実や、さえない現状があり、窓から見える風景が故郷が近づいていることを示していても盛り上がらない気持ち。

イ　忘れていたことによってそれまで過ごしてきた誕生日とは異なる一日になることを予感し、新たな一歩を踏み出そうとしている気持ち。

ウ　風景から高層ビルが消えていくことによって、それまで頭を占めていた就職活動のことも頭から消え、故郷への思いが強くなる気持ち。

エ　就職活動がうまくいかず、自分の誕生日すら忘れていたことを情けなく思い、自分自身の行動や記憶力について責め続けている気持ち。

〔問4〕(4)すると、待ち構えていたように、母が、ほい来た！　と笑顔を投げてくる。そのボールはすとんとまっすぐに私の胸のミットに収まった。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　母が無言のまま誕生日プレゼントであるボールを投げてきたときのことを、笑顔から突然ボールに焦点を移すことで印象的に表現している。

イ　母の祝福とそれを素直に喜ぶ「私」の、言葉に出さなくても互いに感じ合えるやりとりを、キャッチボールを用いて比喩的に表現している。

ウ　娘の誕生日を祝おうと笑顔の準備をしていた母の様子と、そんな母の思いを冷静に受け止めている「私」の様子を、対比的に表現している。

エ　毎年のように「私」の誕生日に繰り広げられる、のれんをくぐってから始まる一連の出来事について、順序立てて説明的に表現している。

〔問5〕(5)私のまえに並んでいた人がのれんをくぐったとき、私はくるりと向きを変えて走り出した。とあるが、「私」が「くるりと向きを変えて走り出した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　てきぱきと働いている母の様子を目にして、就職先も決まらずに誕生日を祝ってもらおうとしていた自分の身勝手さを情けなく感じたから。

イ　大切な日を娘が忘れていることを悲しんでいるにもかかわらず笑顔を絶やさずに働き続けている母の気持ちを思い、申し訳なくなったから。

ウ　化粧っ気がなく客観視するとおっさんみたいな母の姿に恥ずかしさがこみあげてきて、誕生日を忘れていた罪悪感すら消えてしまったから。

エ　就職活動がうまくいかず、大切な日さえ忘れる今の自分には、懸命に働き充実した日々を過ごす母と顔を合わせる資格がないと感じたから。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

哲学という言葉を聞くと、どのようなことをイメージされるだろうか。私が親戚や知人に会ったときに、「哲学を大学で勉強している」というと、多くの人は「へえ、難しそうなことやってるんやね」と言う。たんに難しいというのではなく、「難しそうな」というところがポイントの一つで、「難しい」に「そうな」がつくことで、その言葉を発言している人自身の哲学に対する距離感が現れているように思う。それは、難解というだけではなく、なんだかよくわからないもの、自分とは無関係なものというような、変なものを見るニュアンスが込められているように思われる。もちろん、言葉だけではなく、表情や様子からもそのような雰囲気がたっぷりと醸（かも）し出されている。（第一段）

私自身、学生時代、ここでは書かない方がいいような理由から哲学を選ぶことになったが、それまでは哲学に対して、どちらかというと＊ネガティブなイメージを持っていた。わけがわからない、役に立たない。こういったネガティブなイメージで哲学や哲学をやっている人を見ていた。哲学の分野を大学で選ぶ前は、哲学に接することがなかったので、そういったイメージすら抱いていなかったが、哲学の分野を選んでからそういった印象がむしろ生み出されたように思われる。（第二段）

一つには、言葉の意味がわからない。哲学をしている周りの学生は、哲学書を読んだりして、哲学者の＊テクニカルワードをしばしば会話に挟み、誰々がこういっていたということをよく引用し、しかもそういったものを使った哲学ギャグ（？）的なものを言って笑う。しかし、哲学の勉強なんてしたことがなく、たいして興味もなかった私には、そういったわからない用語が本当に苦手で、何を言っているかわからなかったし、まったく面白くもなかった。哲学書をこっそり読めば、しばらくしたら彼らの言っていることがわかるようになるかと思ったが、こちらはさらに手強（てごわ）く、むしろ哲学に対する苦手意識が高まるだけだった。その頃の私にとって、哲学は、日々の生活からあまりにも遠い距離にあるもののように思われた。（第三段）

それにもかかわらず、何か別の分野を選び直すほどの積極性もなかった私は、そのまま哲学を勉強し続け、いつのまにか、哲学で生計を立てるようになった。わからない哲学書を繰り返し読み、なるべく自分の問題として考え、少しずつわかるようになる。過去の哲学者が何を言っていたのかということだけではなく、むしろ自分なりに哲学のイメージというものが出来上がってきた。(1)私にとって哲学とは、世界観の探求である。私たちは、生きていく中で、多くのものの考え方を身につけていく、子供の頃から暮らしてきた家庭や社会の考え方、学校で習う科学的な考え方、宗教的な考え方や道徳的な考え方。私たちはそういった色々な考え方を、教えられ、意識的にあるいはときには無意識的に吸収し、受け入れていく。しかし、そういった私たちが受け入れてきたさまざまな考え方はそのときどきにはそれぞれ正しいものだと受け取っていても、よくよく考えてみれば、お互いに対立するように思えるようなことがあるかもしれない。(2)私がそういう場合によく学生に出す事例は、色の事例である。私たちは、色が物体に反射した光が私たちの目や脳に刺激を与えて、その結果を知覚するということを例えば高校の生物の授業で習う。この考え方によれば、光を反射する

物体はあくまでも原子や分子などでできたものであり、私たちが見ている色をそれらの原子がそのままもっているわけではない。しかし、私たちは目の前の物体に色がついているように思っている。その目の前にある色は、本当にはどこにあるのだろうか。（第四段）

つまり、一方では、私たちの目の前の物体に色がついているという常識的な考えと、物体それ自体には色はないという科学的な考えには、対立さえあるように見える。しかし、私たちはそのどちらもが正しいように受け入れているのである。（第五段）

こういった疑問は、高校生ぐらいのときに思いつくことも可能だったはずなのだ。しかし、私はそういった自分たちがもっているさまざまな考えの関係や対立に気づくことはなかった。しかし、哲学をしているうちに、そういったことに以前よりは気づき、また何か気になるできごとがあると、それについて少しは以前より考えることができるようになった気がする。（第六段）

今、哲学について考えてみると、哲学はそれ自体は特別な行為ではないと思う。身のまわりにある興味を引く考え方、時には出来事についてそれはどういうことなのか、そこから何が見えるかということを考えることだ。先ほど述べたように、ときにはそこで現れる考え方が、私たちがすでにもっている別の考え方と対立するように見えることがあるかもしれない。そういうときには、まずそれが対立しているように見えるのはなぜかを整理し、本当に対立しているのかを考え、対立しているならばどのようにすれば*整合的にすることができるかを考えればよい。こういった考えどうしの対立の問題ではなくても、ある出来事がおきる背景、そこから見える私たちの世界観、道徳観、そういったものを考える。それは、私たちが生きているこの世界について、よりよく知ろうということである。これはたんなる知的好奇心をみたそうということだけではなく、この世界について理解を深めることによって、この世界と、そしてそこに生きる私の仲間とどのように向き合うのかということを考える手がかりとなることかもしれない。（第七段）

その入り口となる問題は、特に何か大きなものでなくても良い。普段生きている中で出会うあらゆるものがテーマとなりうる。もちろん多くの事柄は、日常の中に埋没し、それが持つ疑問の種子となるものに気づかないかもしれない。しかしふと何か気になることがあれば、ぜひじっくりと考えていただきたい。もちろんずっとそればかり考えているような時間は、私たちにはないかもしれない。しかし、一度中断した疑問も時間のあるときだけでもいいのでまた考えてみてほしい。そしてそういったことを積み重ねていくと、身の回りのことについて多くの疑問が浮かび上がりやすくなるだろう。そして一つ一つの疑問が、「このことを考えるためには、その前にこれについて考えないと……」という仕方で、さらに新しい疑問を生み出してくれるはずである。（第八段）

こうなると人はもはや哲学に足を踏み入れている。そしてこう書くと、実はほとんどの人が哲学に少しは足を踏み入れていると言えるかもしれない。もちろん、そこからどれほど自分の考えをしっかりと形作れるかということについては、経験や訓練によって異なるだろう。自分の考えをしっかりと作るということになると、たんにこうだと思った、ということだけでは十分ではない。説得力、つまり論理の力が必要になる。しかし、哲学

を始める、というその最初の一歩は、まったく難しいことではないという
ことだ。(3)むしろほとんどの人は、すでにその一歩も二歩も、進めた後なの
ではないだろうか。（第九段）

（戸田剛文「今からはじめる哲学入門」による）

〔注〕ネガティブ――否定的。消極的。
テクニカルワード――専門用語。
整合的――考えや意見に矛盾がない様子。

〔問1〕(1)私にとって哲学とは、世界観の探求である。とあるが、「世界観の探求」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　わけがわからない、役に立たないと思っていた人でも、勉強したくなるような動機を探していくこと。

イ　家庭や社会、学校など色々な場面での考え方をそのまま受け入れるのではなく、そこに疑問を持ち否定する意識を身につけていくこと。

ウ　自分たちが生きる世界で、対立している考え方を探し、その対立をどのように整合的にするかを考え、知的好奇心を満たしていくこと。

エ　自分たちの身のまわりの考え方や出来事について考え、理解を深めることによって、周囲との向き合いかたを探る糸口にしていくこと。

〔問2〕(2)私がそういう場合によく学生に出す事例は、色の事例である。とあるが、筆者が「色の事例」を出すのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　多くのものの考え方を身につけてきた中で、そのときどきに正しいのだと受け取っていたのに、そのうちの二つを対立させるとどちらも間違っていることが明らかになる好例だと考えているから。

イ　意識的にあるいはときには無意識的に吸収してきた考え方についてよく考え、お互いに対立するように思える考えがある場合、その解決方法を見つけるきっかけをつかめる好例だと考えているから。

ウ　それまで生きてきた中で身につけてきた色々な考え方のうち、どちらも正しいと思ってきた二つの考え方について相反する内容だと感じられ、真実がわからなくなってしまう好例だと考えているから。

エ　哲学には常識的な考え方と科学的な考え方の二つが存在していて、一見対立しているように感じられることもあるが、実際はどちらも正しいものとして受け入れていくべき好例だと考えているから。

〔問3〕この文章における第八段の役割について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　第七段で述べた内容を受けて、筆者の推奨する物事との向き合い方をわかりやすく示すことにより、読者と哲学との距離を縮めている。

イ　第七段で述べた内容に対して、筆者の提唱する新たな哲学を説明することにより、どちらの考え方がよいか読者に選択を迫っている。

ウ　第七段で述べた内容を踏まえ、いつでも疑問を持つということの大切さを伝えることにより、哲学の難しい点を読者に認識させている。

エ　第七段で述べた内容について、具体的なテーマを与えて考えさせることにより、読者に哲学への第一歩を踏み出させようとしている。

〔問4〕(3)むしろほとんどの人は、すでにその一歩も二歩も、進めた後なのではないだろうか。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　経験や訓練により自分の考えをしっかりと形作れるかという視点で考えると、多くの人が家庭や社会、学校で実践してきていると考えたから。

イ　身近なことに関して疑問を抱いて考えを深めることが哲学の始まりと言え、その視点で見れば、多くの人が経験しているはずだと考えたから。

ウ　自分の考えを形作っていくには論理の力が必要になるため、一見難しそうだと感じるはずだが、まったく難しいものではないと考えたから。

エ　哲学自体は特別な行為ではなく、身の回りの疑問に答えを出す行為であって、どんな疑問でも誰もが一度は答えを出せていると考えたから。

〔問5〕　国語の授業でこの文章を読んだ後、「哲学の入り口に立つ」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに［注］がある。）

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら　（蕪村句集）

これは非常に現代的な俳句に見えます。とても江戸時代に作られた俳句とは思えません。それが与謝蕪村のすごさでしょうか。あるいは名句の力でしょうか。

(1) この句で最初に目に付くのが「愁ひ」です。普通だったら「憂ひ」という漢字を用いるところだからです。では「憂ひ」と「愁ひ」はどう違うのでしょうか。うまく説明できませんが、「憂ひ」の方が個人的な感情に思えます。また程度からいっても、「憂ひ」の方が重いように感じます。

では蕪村の比較的軽い「愁ひ」、必ずしも個人的でない「愁ひ」とはどんなものだったのでしょうか。これも簡単には答えられませんが、なんとなく若者特有のというか、原因不明の悩みのようなものに思えます。

この「憂ひ」と「愁ひ」の違いを＊竹西寛子は、

蕪村の「愁ひつつ」は、なぜ「憂ひつつ」でないのか。「憂愁」という語もあることだし、大差はないと言われる方があるかもしれないけれど、私は大差があると読むので、一句の中の一文字の重みは決していい加減にはできない。

（竹西寛子『竹西寛子の松尾芭蕉集／与謝蕪村集』）

と論じています。これを読んでも違いはわかりませんね。それに対して＊岡信は、

「愁ひつつ」というとき、この愁ひは決して現実的な理由根拠のある愁ひではなく、＊茫然とした青春の哀感と＊憧憬にほかならない。蕪村自身がこれを作った時の個人的事情や感慨を超えて、この句の言葉の姿は、若々しく、＊抒情にみちている。

（『日本縦断　芭蕉・蕪村・一茶の旅』文春文庫ビジュアル版）

と詩的にとらえています。これはみごとな解説ですね。

ところでこの句の季節はというと、「花いばら」が夏の季語なので初夏というところでしょう。ただし「愁ひ」にふさわしいのは春のようですから、晩春から初夏への移り変わりの頃かと考えられます。白い花いばらもまだ満開ではなさそうです。

(2) 実は私がこの句で一番注目しているのは「花いばら」でした。もちろん「花いばら」という名の植物が存在するわけではありません。「野いばら」の花が咲いているので、花に焦点をあてて「花いばら」と称しているのです。

そもそも「いばら」は「茨」で、棘のある植物の総称です。この「いばら」の「い」が脱落して、現在の「ばら」という名称になりました。誤解している人がいるかもしれませんが、「バラ」は決して外来語ではなく、日本語の「いばら」（昔は「うばら・むばら」）から派生した純粋な日本語だったのです。それを(3)なまじカタカナで表記したものだから、外来語と勘違いされたのでしょう（英語名はローズ）。

その「うばら」の用例は『万葉集』に二首認められますが、花のことは歌われていません。その内の一首は東北方言で、「うまら」と発音したよ

＊茫然（ぼうぜん）　＊憧憬（しょうけい）　＊抒情（じょじょう）　＊竹西寛子（たけにしひろこ）　＊岡信（おかまこと）

うです。それに対して漢字「薔薇」は中国伝来のもので、平安時代には特に漢詩で「そうび」と音読されていました。それが下って江戸時代前期の寛文の頃、俳諧の世界でようやく「いばらの花」のことを「ばら」で代表させるようになったと考えられています。

蕪村の句は、そういった歴史の上に作られているのです。言い換えれば、蕪村がようやく「ばら」を文学の対象に高めてくれたことになります。おそらくこの句を踏まえて石川啄木は、

愁ひ来て丘にのぼれば名もしらぬ鳥啄めり赤きばらの実

（『一握の砂』）

という短歌を詠じているようです。赤い実が印象的ですね。また正岡子規も、

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

と春の「ばら」を詠じていますが、ここは(4)に注目している点が斬新です。ここまでくると、「ばら」もようやく韻文の世界で市民権を得ていることがわかります。

（吉海直人「暮らしの古典歳時記」による）

〔注〕
竹西寛子――小説家、評論家。蕪村の「愁ひ」について、平安時代の若い貴族が、人生の初期に経験するとりとめのない「ものおもい」に近いと論じている。
大岡信――詩人、評論家。
茫然――漠然としてつかみどころのない様子。
憧憬――あこがれること。
抒情――自分の感情を述べ表すこと。

〔問1〕(1)この句で最初に目に付くのが「愁ひ」です。とあるが、この文章の筆者による「愁ひ」の説明の仕方として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 蕪村が「愁ひ」を使ったことの意味について、竹西氏の解説と大岡氏の解説を並記することにより、どちらが正しいのかを考えさせている。

イ 竹西氏の解説を紹介して、蕪村が「愁ひ」を使ったことの意味深さを感じさせ、大岡氏のとらえかたに導いてその説得力を印象付けている。

ウ 筆者とは異なる「愁ひ」のとらえ方として竹西氏の解説を否定的に論じ、筆者が同意する大岡氏の解説を使い持論の正しさを強調している。

エ 「愁ひ」について、筆者のとらえ方だけではなく竹西氏と大岡氏の解説を示すことで、多様な解釈ができる蕪村の句の奥深さを伝えている。

〔問2〕(2)実は私がこの句で一番注目しているのは「花いばら」でした。とあるが、筆者が「花いばら」に注目していたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「花いばら」という名の植物が存在するわけではないのに、俳諧の世界では「ばら」を意味する言葉として使われるという特殊性があるから。

イ 「花いばら」は純粋な日本語であるにもかかわらず、外来語と勘違いされやすいため、俳諧では用いるべきではない言葉とされていたから。

ウ 「花いばら」は、用いることができるようになるまでの歴史を想起させる言葉であり、現代的な俳句と感じさせる要因の一つであるから。

エ　「花いばら」は『万葉集』でも歌われていない言葉であり、歴史上で初めて蕪村が俳諧に持ち込んだということが明らかになっているから。

〔問3〕(3)なまじ　とあるが、ここでの意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　中途半端に　　イ　見事に　　ウ　何度も　　エ　偶然

〔問4〕(4)　に入る言葉として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　棘ではなく、花　　イ　花ではなく、棘

ウ　色ではなく、形　　エ　形ではなく、色

〔問5〕筆者が文章中、石川啄木と正岡子規の歌を引用したのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　蕪村の句と同じように、「ばら」を文学の対象にまで高めることを意識しながら作られた歌の存在を示そうと考えたから。

イ　蕪村と同様に「ばら」を用いながら、蕪村以上にすぐれた歌を作ることに成功している具体的な例を示そうと考えたから。

ウ　蕪村の句を踏まえ、蕪村と似た歌を作るために蕪村の句に使われた「ばら」を用いている歌の存在を示そうと考えたから。

エ　蕪村が文学の対象に高めてから、やがて歌に取り入れるものとして「ばら」が浸透していった流れを示そうと考えたから。

第 5 回
（1月）

テスト 時　間	50 分

平均点 （都標準）	66 点

問題番号		正答率
1	(1)	87.6
	(2)	88.8
	(3)	80.7
	(4)	82.2
	(5)	86.2
2	(1)	65.1
	(2)	74.3
	(3)	55.2
	(4)	83.8
	(5)	84.9

問題番号		正答率
3	〔問 1〕	56.3
	〔問 2〕	48.5
	〔問 3〕	86.9
	〔問 4〕	85.9
	〔問 5〕	84.0
4	〔問 1〕	35.5
	〔問 2〕	64.0
	〔問 3〕	79.9
	〔問 4〕	76.7
	〔問 5〕	3.8点

問題番号		正答率
5	〔問 1〕	48.4
	〔問 2〕	29.6
	〔問 3〕	74.3
	〔問 4〕	69.3
	〔問 5〕	66.0

注：4〔問 5〕の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 目の粗いふるいにかける。
(2) カーテンで直射日光を遮る。
(3) 苦渋に満ちた表情を浮かべる。
(4) 有名な句を刻んだ石碑を見にいく。
(5) 今まさに人生の岐路に立っていると思う。

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) うれしいヒメイをあげる。
(2) 海外でのエイジュウ権を得た。
(3) タイレツを崩さないように行進する。
(4) 最近のお年寄りはオいを感じさせない。
(5) 正しい手順を踏んで実験を成功にミチビく。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

眞家早馬（まいえそうま）は管理栄養士として働いていたが、びわ湖毎日マラソンに弟の春馬（はるま）や、大学で一緒に走った藤宮藤一郎（ふじみやとういちろう）、高校時代の親友の助川亮介（すけがわりょうすけ）が出場し、自分も給水係をしたことで、スポーツ栄養学を学ぼうと決意し、紫峰（しほう）大の大学院に進学する。早速、手作りの味噌（みそ）入りの蜂蜜カステラを持参して、所属予定の研究室の小佐内（おさない）教授に挨拶に行くと、いきなり駅伝部監督の館野達也（たてのたつや）に紹介される。館野に駅伝部に入ってほしいと頼まれるが、早馬はてっきり選手としてだと誤解して、辞退しようとする。

「選手として、ではないんです」

小刻みに首を横に振った館野に、早馬は失礼とわかっていながら「は？」と首を傾（かし）げた。

「眞家さんは、紫峰大の大学院でスポーツ栄養学を学ぼうとしているんですよね？」

「はい、そうですよ」

早馬ではなく、何故（なぜ）か小佐内先生が頷（うなず）いた。

「将来は、スポーツ栄養士を目指しているんですよね？」

また、小佐内先生が「そうです」と頷く。(1)確かに、大学院の志望理由書にそう書いた。書いたけれど。

「眞家さん、駅伝部でコーチアシスタント兼栄養管理を担当していただけませんか？」

言いたいこと、聞きたいことが喉でつっかえて、言葉にならなかった。

意味もなく、館野と小佐内先生の顔、手元にあるカステラを、順番に見てしまう。

「うちの大学はでかくて立派ですけど、運動部の予算はびっくりするくらい少ないんです。駅伝部の選手はオンボロ寮で生活してるんですが、管理人の爺さんが正月にちょっとスキー場でハッスルして怪我をして、そのまま退職することになったんです。後任の管理人がいつになっても来なくて、寮は酷い有様です。特に食事が酷い。今日の朝飯なんて、具が卵とカニかまだけのチャーハンですよ。しかもめちゃくちゃ味が濃い」

「あ、それは酷い」

スポーツ選手の朝食としても、普通の人の朝食としても、最悪だ。早馬がやっと捻り出した言葉に、館野は鼻息荒く首を縦に振った。

「酷いでしょ？　監督としては、選手達に質の高い練習環境を提供したい。頑張った分だけちゃんと力になる栄養サポート体制を整えてやりたいんです」

「それは結構ですし素晴らしいことですけど、どうして俺なんですか。ちゃんとした管理栄養士を雇えばいいじゃな……」

「運動部の予算はびっくりするくらい少ないんです」

先ほどの台詞を繰り返し、館野は肩を落とす。「なるほど」と唸ってしまった。

「バイト代程度ですけど、給料は出します。コーチアシスタントを引き受けてもらえたら部員扱いできるので、寮に入ることもできます。家賃は光熱費込み月額四千円です」

「安っ」

「その代わりオンボロですけどね」

コーヒーカップを片手に小佐内先生が言う。「あ、でも一応、鉄骨造りですよ」とよくわからないフォローを入れてきた。

「駅伝部のことを広報課から聞いて、眞家君の志望理由書と研究計画書を読んで、これはマッチするんじゃないかなと思ったんですよ」

にこにことカステラを頬張りながら言う小佐内先生に、早馬は彼が館野の隣に座った理由が今になってわかった気がした。先生は、完全に館野側で早馬を勧誘しているのだ。

「そう！　絶対に、眞家さんの研究にも役立つはずと僕も思います」

にっこりと頷く館野に、早馬は溜め息を我慢するのをやめた。(2)テーブルに両肘を突き、深々と息を吐き出す。

「俺は、箱根を走れませんでしたけど、それでも日農大で四年間走りました。予選会を勝ち抜いて箱根を走るには、選手の努力はもちろんですけど、環境を整えるためのサポートがどれだけ大変か、知ってます」

アスリートの栄養管理なんて、専門家が携わるべきものだ。管理栄養士として三年勤務しただけで、これからスポーツ栄養学について研究しようとしている若造が、手を出していいわけがない。

「正直、俺がやりたいことのど真ん中というか、やれたらいいなって、ちょっと思いました。思いましたけど、俺の《やってみたい》という気持ちのために、選手達の大事な一年を使っていいわけがない」

(3)観ている側からすれば、箱根駅伝は年に一度のお正月の風物詩だ。でも、選手からすれば人生で四度しか走る機会のないレースなのだ。たった四回だ。たった四回のために、彼らは学生生活を賭けて走る。箱根駅伝を選手人生の最後の舞台と位置づける者も、大勢いる。目指して、努力して、その舞台に立てずに去る者は、もっとたくさんいる。

自分が、そうだったみたいに。

「別に僕も、眞家さんをプロのスポーツ栄養士の代わりにしようだなんて思ってないです。ただ、僕と選手達と眞家さんのチャレンジが上手く合わさるれば、もしかしたらこれまでにない結果に辿り着けるかもしれない。それに、眞家さんが入部してくれたら、きっと選手達にいい影響があると思ってます」

「いい影響、とは」

「うちの部には、卒業後に実業団に進むような選手はほとんどいません。大半が、大学を卒業したら一般企業に就職をします。だから眞家さんみたいに、大学卒業後にアスリート以外の道で頑張っている人が側にいたら、特に低学年の選手達は自分のキャリアを考えるいいきっかけになるんじゃないかと思って」

(4) それらしいことを言われて、ぐぬう、と唸ってしまう。小佐内先生が力強く頷くものだから、だんだんと断りにくい気分になってくる。

「できたら眞家さんにも、自分の将来のためにうちを活用する気持ちで、飛び込んでもらえたら嬉しいです。あとカステラって、レースとか練習前の栄養補給にいいですよね。これ、ぜひ寮でも作ってあげてほしいです」

再び館野が頭を下げてくる。さっきよりずっと深く、テーブルの天板に額をぶつけそうになった。小佐内先生も、かしこまった顔で早馬を見る。

「僕、大学の広報委員長なので、駅伝部が箱根駅伝に出てくれたら嬉しいです。凄い宣伝効果があるので」

そういえば、初めて自分でカステラを作ったのは、高校生の頃だった。同じ高校で、同じ陸上部で活動していた春馬と助川のレースに差し入れた

「ちょっと、考えさせてください」

そのとき、自分がスポーツ栄養士を目指すと、助川に打ち明けたんだった。

高校生の自分だったら、この話に飛びついた。夢に近づく提案を、摑んで離さなかっただろう。サポートする側としてもう一度箱根駅伝を目指せるのだと、心を躍らせた。

(5) そう考えると、どうやら自分も少しは大人になったんだなと思う。

だって、あの頃のカステラには、味噌は入ってなかったんだから。

(額賀　澪「タスキメシ―箱根―」による)

〔問1〕 (1) 確かに、大学院の志望理由書にそう書いた。書いたけれど。とあるが、このときの早馬の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　自分が意識している将来の方向性を他人から改めて確認されていることで気分を害し、きちんと返事をしようという気になれなくなっている。

イ　書いたのは間違いないのだが、改めて確認されると断言する勇気が出ず、本当に自分が思ったことを書いたのかどうか自信がなくなっている。

ウ　話題がどこに向かおうとしているのかまったくつかめない状態にもかかわらず、返事をする間もなく会話が進行していくことに戸惑っている。

エ　思いもよらず自分の将来の夢が実現しそうな予感がするため、この機会に自分の気持ちをうまく伝えなければいけないと思い、あせっている。

〔問2〕 (2) テーブルに両肘を突き、深々と息を吐き出す。とあるが、このと

きの早馬の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　研究に役立つはずだと気をまわしてくれる館野を前に、この場で断るのが申し訳なくなり、じっかり考えて返事をしようと決意している様子。

イ　絶対に引き受けてもらおうと勢い込んでいる館野に対し、本心をどう伝えるか困惑しつつも、きちんと話さなければと覚悟を決めている様子。

ウ　経験のない自分を軽々しく勧誘する館野に対し、選手の気持ちを理解してほしい思いがこみあげ、意識を変えさせようと意気込んでいる様子。

エ　将来目指しているものを理解したうえで、経験のない自分を真剣に勧誘してくれる館野に感謝し、自分にできるか確かめようとしている様子。

〔問3〕(3)観(み)ている側からすれば、箱根駅伝は年に一度のお正月の風物詩だ。でも、選手からすれば人生で四度しか走る機会のないレースなのだ。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　箱根駅伝に対する捉え方について、異なる立場からの見方を対句的に書き分けつつ示すことによって、その違いをわかりやすく表現している。

イ　様々な人の思いが交錯する箱根駅伝について、比喩を用いながら二つの立場について念入りに説明することによって、印象的に表現している。

ウ　箱根駅伝が有するプラスの側面とマイナスの側面について、改善していく必要性を感じる部分が明らかになるように、対照的に表現している。

エ　多くの人が認知している箱根駅伝について、改めてその華やかさを印象付けるため、感覚的な言葉を用いつつ鮮やかに描写して表現している。

〔問4〕(4)それらしいことを言われて、ぐぬう、と唸ってしまう。とあるが、このときの早馬の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　やりたいことができそうだと思い始めていたが、館野が選手との新たなかかわりかたを提案してきて、やるべきか改めて悩み始めている様子。

イ　次々と言葉を投げかけて早馬の心を動かそうとする館野に乗せられず、安易に選手にかかわるべきではないと思い、心を抑えて耐えている様子。

ウ　聞いている限りではよさそうだと感じることばかりを館野が話してくるので、かえって納得することができなくて、警戒して構えている様子。

エ　早馬の考えを聞いて引き下がるどころか、選手にとってもいい話だと館野が説明してきたことによって、返す言葉もなく心が動いている様子。

〔問5〕(5)そう考えると、どうやら自分も少しは大人になったんだなと思う。とあるが、早馬が「少しは大人になったんだな」と思ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　ごく普通のカステラを作っていた頃とは違って、夢に近づける提案を受け入れないという、普通の人ならばできない独特な判断を下したから。

イ　カステラに自分なりの工夫を施したように、いい話だと感じてもそのまま受け入れず、いったん自分なりに考えようという判断を下したから。

ウ　普通のカステラで満足できていた頃とは違って、目指そうと思った職業に近づいてもそれで満足せず、より合う職業を探そうとしているから。

エ　カステラの味がより良くなったように、高校生の頃目指すと決めた職業にもうすぐ就けるというところまで自分が成長したのだと感じたから。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

国語をめぐって起こっている問題の本質は、一体何でしょう。それは、「ことばをツールだと思っている」ところにあるのではないか、これが私の基本的な見方です。つまり、ことばの捉え方が基本的に間違っているのではないか、そう考えています。（第一段）

きちんと説明する必要がありそうですね。ツールと聞いたら、ほとんどすべての人は、「みんな普通、そう思っているんじゃないの」と答えるだろうと思うからです。日本語、英語、私が研究で普段読んでいる古典ギリシア語など、言語はさまざまですが、基本的に、語学を学ぶのは何かに使うため、つまり言語はツールだと考えられています。日常のコミュニケーションも含めて、仕事に役立てるとか、海外で料理をオーダーするとか、そういった場面を念頭において、言語を学ぶからです。そのように、私たちは通常、ことばは一種のツールだと思っているはずです。（第二段）

私も「ことばはツールではない」と全面否定するわけではありません。実際、海外旅行の際には即席で現地の日常会話を学んだりしますからね。ですが、ことばを単なるツールに過ぎないと思い込むことで、大きな間違いがいろいろな形で生じているのではないか、と考えています。この論点が、まず何よりも大切です。（第三段）

どのような問題が生じるかというと、ツールだったら、どちらの方が良いか、といった議論になってしまいます。ツールとしてどちらを使うのが便利か、効率がよいか、という観点に縛られます。例えば、ものを切る時に、ナイフが良いのか、ハサミが良いのか、という、そういう話になるのです。道具には用途があります。裁縫で糸を切るのにナイフは不向きですが、ケーキを切るにはハサミでは効率が悪過ぎます。ツールは、そのように用途におうじて良し悪(あ)しが判断されます。（第四段）

私たちが話している日本語をツールと考えることで、国語科について提起されている、文学国語か論理国語か、といった訳の分からない選択が生まれてしまいます。つまり、ツールとしてどちらがより良いか、という選択の対象になってしまいます。何かのためのツールだったら、より有効な方が良い、より役に立つ方が良い、つまり、より効果的に使える方が良い、という発想になります。そこに落とし穴があります。（第五段）

ここで、あらかじめ私の見立てを述べておきます。目下の議論において、「論理国語よりも文学国語が大切だ」と主張しても、「両者の区別が不適切である」と言っても、もしツールという見方の上に立って発言するとしたら、有効な批判にはならない、いや、結局は相手と同じ土俵に立っていることになるのではないでしょうか。(1)そのような議論なら不要ですし、かえって墓穴を掘ることになりかねません。それゆえに、問題を根本的に考え直す哲学からの反省が必要となります。（第六段）

ツールであるということの＊含意を、もう少し掘り下げて考えてみましょう。ツールである以上は、何かの目的のために使うわけですから、当然効果をねらうことになります。その場合には、例えば、理解力とか、読解力も含めて、特定の目的のための手段として、効果が測定されます。（第七段）

「何とか力(りょく)」という言葉を文科省は大好きなようですが、力というのは、この場合、その人が持っている本来の善さというよりは、何かをするため

の道具とみなされています。ギリシア哲学では本来の善さを「アレテー」と呼びます。この言葉は通常「徳」や「卓越性」と訳されますが、その人や物が持つ本来の力を発揮することを意味します。花が美しく咲くとか、鳥が空を自由に飛ぶとか、そういう例です。それに対して、道具とは、もともとは持っていないものを外から付け加える、そのような力です。（第八段）

ツールとして役に立つことばは、持っていた方が良い、身につけるべきだという理屈になります。仕事に就いた時に読解力がなかったらそもそも契約書を読めないでしょう、といった発想です。そんな発想は、基本的にはツールとして、効率という観点だけでことばを取り扱っています。結局、そこで目指されているのは労働力なのです。経済界、産業界が大学で、あるいは高校で教育をしてくれと求めているのは、一番効率よく、仕事がたくさんできる人材を作ってほしいということに尽きます。つまり基本的に、ことばは道具扱いされている。(2)それによって、私たち人間も道具扱いされています。（第九段）

道具である以上、ツールである以上、簡単な方が都合が良いのは当然です。一番手間がかからず、一番多くの人が使える共通のツールを与える、それが社会的にはもっとも効率が良いわけですよね。効率という観点がここに入ってきます。紙を切るという目的は、大型ナイフを使ってもできないことはありませんが、ハサミでチョキチョキと切る方がずっと効率が良いですよね。そういった考え方です。（第十段）

ツールであっても、いつも効率だけで話が進むわけではありません。例えば、おもしろい道具を、複雑だけど使いたいといった、そういう趣味の人もいるかもしれません。昔の人が使った乗り物を復元して冒険する、といった場合です。しかし、通常ツールというものは、何かの目的との費用対効果で価値がはかられますので、できるだけ簡単なものが選ばれます。（第十一段）

ことばがコミュニケーションのツールだと見なされると、できるだけ手間をかけずに、正確に目的を達成できれば、それだけ望ましいことになります。費用対効果としては、学習に費やされる時間や労力と、それがもたらす仕事の量や質との関係が問われるのです。見慣れない文字や複雑な文法など新たに学ばなくても、小学校から学んできたアルファベットと英語だけ使えれば、世界中で通用すると思われてしまいます。わざわざ難しい言語にチャレンジする必要はない、ということです。英語の教育で「実用的」であることばかりが求められていますが、その背景にはこのような誤解があると、私は考えています。（第十二段）

こういった発想は、*人文学にとっては危機となります。ことばをツールとして扱うと、*沼野先生がご専門とされるロシア語とか、*大西先生がご専門とされる中国語とかは、使い勝手が悪い、と言うと失礼ですけども、使っている人が限定されるので学ばなくてもよいという話になっていきます。英語だけ学べば十分だとする、すでに*蔓延した考えもこうして生まれてきているようです。（第十三段）

これに関しては、一つ大きな誤解があります。現在でも世界には英語が通じない地域、他の言語が共通語として重視される地域がたくさんあるからです。英語だけできれば世界中でコミュニケーションがとれるというのは、単なる幻想です。ですが、世界の事情を知らない日本の行政では、英

語はグローバルに通用するのだからそれだけ習得すれば十分だと思われているようです。（第十四段）

大学生の皆さんも、フランス語やドイツ語が不人気だからといって、英語の先生になれば安泰だと思ったら大間違いです。これから自動翻訳機が格段に進歩することを想像してください。自動翻訳機が普及したら、ツールとしての英語は機械に任せればよいので、英語の先生はゼロでもよくなります。つまり、語学の勉強自体が必要なくなってしまうのです。ですが、その場合には、英語を介さなくても各言語間でコミュニケーションがとれるようになるという利点もあります。タガログ語とルーマニア語とか、スワヒリ語と日本語とか、あらゆる言語の間で機械が直接に翻訳作業を行って、私たちの代わりに話してくれるでしょう。（第十五段）

実用的な英語を教えるとか、英語をとにかくしゃべれるようにするとかという目標は、それだけが自己目的となって、何を語るのかという内容を考えないとしたら、かえって英語教育の自滅を意味します。少し厳しい言い方ですが、実用性重視という根本的な誤りは、文科省や産業界だけの責任ではなく、私たちことばに関わる教育関係者の問題だと感じています。（第十六段）

この発想を突き詰めていくと、情報だけが欲しい、つまり、ことばという面倒なツールを使わなくても成果だけ確保すれば良いということになりませんか。英語ですら必要がなくなり、情報ツールだけが使えれば良いという話になるのです。さらには、日本語だって必要なくなるかもしれません。単語だけ入れれば、検索ソフトが必要な情報を与えてくれるようになる可能性もあるのですから。その場合でも、日本語の単語くらいは必要かもしれませんが、ことばは単語や情報だけでは成立しません。（第十七段）

こういった事態は、どこか本末転倒ではないでしょうか。つまり、ことばがツールだとしたら、今言ったように、基本的には一番単純で効率的なものが良いので、機械が自動的に目的を果たしてくれればそれでよくなる、つまり、ことばそのものが必要なくなってしまうからです。（第十八段）

ここで生じる最大の問題は、ことばを大切にしないことで、おそらく、人権や民主主義や自由といった、私たち人間が長い間ことばを通じて培ってきた価値について、非常に大切な部分が決定的に損なわれる危険があることです。(3)私は、ことばの危機がもたらすのは人文学や人間にとっての危機ではないかと考えています。（第十九段）

（納富信留「ことばのあり方」による）

〔注〕 文学国語か論理国語か――文学的な文章を扱う「文学国語」と、論理的・実用的な文章を扱う「論理国語」から選択する方式。高校で学ぶものについて「国語」という科目を再編する動き。

含意――表面に現れない意味を含みもつこと。

人文学――哲学・文学・歴史学などのような、人類の文化に関する学問の総称。

沼野先生――沼野充義。スラヴ文学者。

大西先生――大西克也。中国語学者。

〔問1〕(1)そのような議論なら不要ですし、かえって墓穴を掘ることになりかねません。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　ツールとしてどちらがより良いかを選択するのであれば、より効果的に使える方が良いという結論に行き着くため、改めて論理国語と文学国語を持ち出して論じるまでもない問題になってしまうと考えたから。

イ　現時点では、論理国語よりも文学国語が大切だという立場で発言することは有効とされていないため、論理国語と文学国語の選択を論じてみたところで相手を説き伏せることなどできないだろうと考えたから。

ウ　論理国語と文学国語のどちらが大切なのかを論じている場において、両者の区別そのものが不適切であるという主張は論点からずれているのであり、発言として有効なものとはされにくいだろうと考えたから。

エ　論理国語と文学国語の選択を論じることはことばをツールと捉えていることを前提としていて、問題の本質からずれるし、捉え方が異なるのに論じても思う方向には議論が進まない可能性があると考えたから。

〔問2〕(2)それによって、私たち人間も道具扱いされています。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　ことばをツールとして身につけさせようとするということは、ことばを発するためだけの存在として人間を見ていることを示すと考えたから。

イ　効率よく仕事ができる人材を作ってほしいと要求されているに過ぎず、効率という観点だけでことばを扱う人は求められていないと考えたから。

ウ　ツールとしてより役に立つことばを身につけさせる発想には、労働者としか使い勝手のいい人間がよいのだという意識が見えると考えたから。

エ　ツールとして役に立つことばを持っていない人は、仕事において役に立ちにくいため、人間らしい扱いをされないことが多いと考えたから。

〔問3〕この文章の構成における第十四段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　それまでに述べた言語について蔓延する考えに関して、世界の現状をふまえ、本来とるべき方策を説明することによって、論の展開を図っている。

イ　それまでに述べた言語の教育における状況をふまえ、本来とるべき方策を説明することによって、論の展開を図っている。

ウ　それまでに述べた言語にまつわる危機の話題について、筆者の経験に基づいた具体的な事例を挙げ、持論を補強している。

エ　それまでに述べた言語の現状を受けて、そこに至る経緯を簡潔にまとめることによって、詳しく分析する契機にしている。

〔問4〕(3)私は、ことばの危機がもたらすのは人文学や人間にとっての危機ではないかと考えています。とあるが、「人文学や人間にとっての危機」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　効率や実用性重視の考え方を突き詰めると、世界中で通用すると言われる英語以外不用になり、英語を使わない国の文化が消えること。

イ　ツールと見なした結果ことばの必要性が薄れ、言語そのものの存続や、ことばを用いることで築き上げてきたものにまで影響が及ぶこと。

ウ　ことばを使わなくても成果だけ確保すれば良いという発想に基づき機械任せになっていくことで、人間の必要性がなくなっていくこと。

エ　情報ツールだけが使えれば良い状況で残るのは単語と情報だけで、こ

とばが成立しないために人間同士の会話が成り立たなくなること。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「ことばをツールと見なす発想」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次は*崔顥(さいこう)の漢詩『黄鶴楼(こうかくろう)』とその鑑賞文である。これを読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

黄鶴樓　　黄鶴楼

昔人已乘黄鶴去　昔人(せきじん)已(すで)に*黄鶴に乗じて去り
此地空餘黄鶴樓　此(こ)の地　空(むな)しく余す　黄鶴楼
黄鶴一去不復返　黄鶴　一たび去って　復(ま)た返らず
白雲千載空悠悠　白雲　千載(せんざい)　空しく悠悠
晴川歴歴漢陽樹(1)　晴川(せいせん)　歴歴(れきれき)たり　*漢陽樹(かんようじゅ)
芳草萋萋鸚鵡洲　芳草(ほうそう)　萋萋(せいせい)たり　*鸚鵡洲(おうむしゅう)
日暮郷關何處是　日暮(にちぼ)　郷関(きょうかん)　何(いず)れの処(ところ)か是(こ)れなる
煙波江上使人愁　煙波(えんぱ)　江上(こうじょう)　人をして愁(うれ)えしむ

（大意）遠い昔、ここを訪れた仙人は黄鶴に乗って飛び去り、この地に遺(のこ)されたのは黄鶴楼だけだ。仙人と黄鶴はひとたび去ればまたと返らないが、この伝説を目撃した白雲は、千年経(た)っても空しく悠々と浮かぶ。晴れわたった川の彼方(かなた)から、目に映ってくるのは漢陽城の木立ちであり、緑に覆われ草花の香りを漂わせるのは、やはりかの鸚鵡洲だ。暮れゆく空を見上げた刹那*、何故(なぜ)か胸に郷愁が満ちあふれた。ふるさとよ何処(どこ)にあるのだろうか。夕靄(ゆうもや)が立ちのぼり、黙々と流れる長江は今、わたしの心に言いしれぬ愁いを注いでいる……

史料によれば、黄鶴楼は三国時代、呉の黄武二（二二三）年に建てられ、敵情を見張る望楼として、武昌（湖北省武漢市）の蛇山から長江を俯瞰する形で聳えていたという。(2)が、民間では全く違う説話が古くから伝えられてきた。

費子安という仙人が、川辺にあった辛氏の酒屋に来て酒を求めた。大いに飲んではまた次の日に来るが、一度も勘定を払おうとしなかった。店主の辛氏も、ただ大杯で飲ませつづけるだけで一度も勘定を払ってくれと言わない。それに少しも嫌な色を見せなかったのである。こうしているうちに数年が経った。ある日、子安は辛氏に言った。

「だいぶ世話になったのう。少し(3)ばかりは恩返しをさせてもらおう」

彼は蜜柑の皮で白い壁に鶴を描き、

「客に手拍子をさせ歌をうたわせれば、鶴は壁から下りて踊ってくれるだろう」

と言い遺して店を出た。辛氏がすかさず試してみると、果たして鶴が本当に踊ったのである。

それから、黄色い鶴が酒興を盛り上げる話は遠近に伝わり、新奇を追う者は舞う鶴を見るため先を競って辛氏の酒屋にやってくる。十数年後、酒屋は繁盛を極め巨万の富を成した。やがて子安が再び現れ、微笑みながら笛を吹き始める。その旋律は*悠揚にして天に届くかのようだ。間もなく、一片の白雲が空から降り、黄鶴も壁から舞い出た。(4)子安は鶴に跨り雲に乗じて悠然と飛び去る。その飛び立ったところに、辛氏は感謝をこめて黄鶴楼を建てた、という。

さて、崔顥「黄鶴楼」はこの説話から詠み起こされている。仙人や舞う鶴は、もとより存在せぬものであった。それを知っていながら、「一たび去ってまた返らず」と言うのは、実は過ぎゆく歳月を暗示しているのだ。遺された黄鶴楼や悠々と千年もの間浮かんでいる白雲も、ただただ歳月の流れを無言に告げるだけ。

前半の四句に、「黄鶴」と「空」がそれぞれ二回も使われており、重複を忌避する律詩の約束事を大いに破っている。それでも単調さを感じさせないのは、やはり飛び去った黄鶴に、二度と戻らない歳月への愁嘆がひしひしとこめられているからであろう。そしてそれとは対照的に、楼閣や白雲の存在の空しさが強調されているからに違いない。

唐代の詩は、一般的には「聯」をもって最小単位と見なしている。「聯」とは、上、下二句のことを言う。律詩は八句からなるものであるが、その八句はまた、上下二句ずつの四つの聯に分けられ、それぞれ首、頷、頸、尾という名を持つ。慣例によって、それらは起、承、転、結とも意味づけられている。

首、頷二聯では、崔顥は同じ言葉を繰り返し、歳月を嘆いて*蒼茫たる雰囲気を作り出していた。頸聯に至り、彼は「転」の規則を踏まえ、仙人、黄鶴に対する空想から眼前に広がる実景へと視線を変えた。無常なる歳月と不変の天地に囲まれる中、やがておのれの存在がいかに小さいかということにも気づかずにはいられない。空想と実景という強い対比を通して、崔顥は胸にあふれんばかりの無力感を訴えたのである。

(5)彼は尾聯で再転し、おのれの視線を再び見えぬものへ投げた。暮れ方は、いつもさすらう者の*帰心をそそる。黄鶴楼から夕靄の立ちこめた長江を眺めて、崔顥は心を遥か遠い故

郷へと馳せた。空想から実景へ、実景からまた想念へ――その一転、再転の技法は詩人の内心に秘める郷愁を余すところなく表現し、深い余韻を醸し出しつつ作品を結んでいるのである。

（荘　魯迅「漢詩　珠玉の五十首」による）

〔注〕崔顥――中国盛唐の詩人。
黄鶴――黄色い鶴。
漢陽――黄鶴楼のある武昌から長江を隔てて対岸にある街。
鸚鵡洲――長江の中州の名。
刹那――瞬間。
俯瞰――高い所から見下ろし眺めること。
悠揚――ゆったりとして落ち着いているさま。
蒼茫――見渡す限り青々として広いこと。
帰心――自宅や故郷に、帰りたいと願う気持ち。

〔問1〕(1)晴川歴歴漢陽樹／芳草萋萋鸚鵡洲　とあるが、これに関して本文中で説明されている内容として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　それまでは同じ言葉を繰り返しながら約束事に従って描写してきたが、ここは律詩の約束事を大いに破ることで単調さを感じさせない。
イ　実際には存在しないものを中心に描写していたそれまでと対比的に、ここは目に映る実際の景色へと意識を移した部分になっている。
ウ　空想と実景をそれまで描きわけてきた中で得られた実感として、ここでは自分の存在がいかに小さいのかということを強調している。
エ　空想することの空しさを強調していたそれまでの部分から踏み込み、ここでは胸にこみあげる無力感を訴えていることが読み取れる。

〔問2〕(2)が、民間では全く違う説話が古くから伝えられてきた。とあるが、この文章の筆者である荘氏が、史料に書かれているものとは「全く違う説話」を引用したのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　本文中で説明する漢詩を作った人物と、その行動を伝える説話になっているため、人物像を知ることにより漢詩の理解が深まると考えたから。
イ　本文中で説明する漢詩の奥深い内容がもととなって、説話として広く伝えられていったという経緯があり、漢詩の価値が伝わると考えたから。
ウ　本文中で説明する漢詩とは対照的な内容になっていて、一つの場所に対する見え方が説話と漢詩では異なることが印象に残ると考えたから。
エ　本文中で説明する漢詩が作られるにあたり、説話で伝えられている内容の一部が下敷きになっていて、漢詩の理解の助けになると考えたから。

〔問3〕(3)ばかり　とあるが、この「ばかり」と同じ意味・用法のものを、次のア～エの――を付けた「ばかり」のうちから選べ。

ア　急いだけれど一時間ばかり遅れてしまった。
イ　帰ったばかりなのにすぐに外に出て行った。
ウ　ほめられるのは妹ばかりなのがいやになる。
エ　おやつを食べ過ぎたばかりに腹が減らない。

〔問4〕(4)子安は鶴に跨り雲に乗じて悠然と飛び去る。とあるが、「黄鶴楼」での同様の描写に関する、この文章の筆者である荘氏の解釈として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　「黄鶴」が前半に二回使われている点に、漢詩の中心として「仙人」ではなく「黄鶴」を強く意識していたということがうかがえる。

イ　「昔人」を「黄鶴に乗じて去り」と表現しながら、再び「黄鶴」に触れている点に、去らなければよかったという後悔を暗示している。

ウ　伝説の世界の仙人や黄鶴について「一たび去って　復た返らず」としている点に、戻ることのない歳月に対する思いが感じ取れる。

エ　「一たび去って　復た返らず」としている点に、起、承、転、結における「結」としての役割が感じられ、唐代の詩らしさが伝わる。

〔問5〕(5)彼は尾聯で再転し、おのれの視線を再び見えぬものへ投げた。とあるが、ここで「見えぬもの」と表現されているものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　黄鶴楼　　イ　夕靄　　ウ　長江　　エ　故郷